

Hokkaido University News

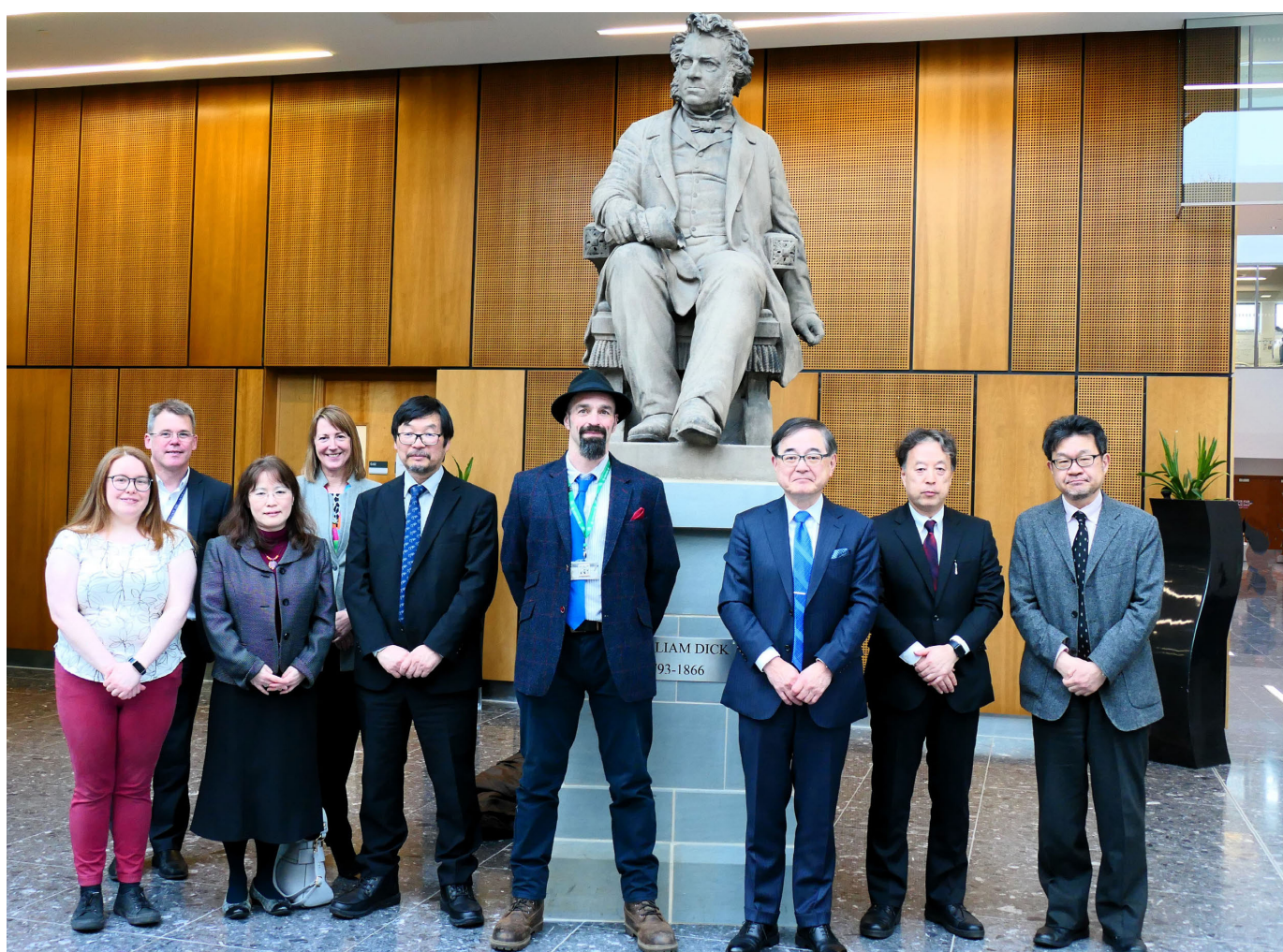
北大時報

令和6年

3

No. 840 March 2024

北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）の実施と合格者の発表
令和5年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙行
令和5年 北大ペンハロー賞授与式を挙行





令和5年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙



令和5年 北大ペンハロー賞授与式を挙

全学ニュース

- 1 北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）の実施と合格者の発表
- 3 フロンティア入試Type I 最終合格者の発表
- 4 国際総合入試合格者の発表
- 5 令和5年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙
- 6 博士学生支援プログラム採択学生向け確定申告セミナーを開催
- 7 令和5年 北大ペンハロー賞授与式を挙
- 8 北海道内のIT企業による留学生向け合同説明会「HOKKAIDO IT JOB FAIR」を開催
- 9 高橋理事・副学長がアジア大学フォーラムに出席
- 10 サプリ・キチマリ駐日コソボ共和国大使による講演会を開催
- 11 令和5年度 第9回定例記者会見を開催
- 12 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 15 高等教育推進機構国際教育研究部で「第3回北海道地域日本語教育シンポジウム『まるごと北海道+沖縄 わいわい考える多文化共生のイマ』」を開催
- 16 スタートアップイベントHOKKAIDO INNOVATION WEEKにて学生企画「THE NORTHERN CHALLENGE 2024」を実施
- 17 nano tech 2024で最新のナノテク研究成果をアピール！
- 18 PIZZERIA DEL CAPITANOとのコラボレーションにより小中学生向けアントレプレナーシップ教育プログラム「チャレンジ・ピッツァ」を実施
- 19 国際連携機構リクルーティングオフィス キックオフシンポジウム～大学院留学生リクルーティング戦略と、証明書のデジタル化について考える～を開催
- 20 総長一行が英国エジンバラ大学を訪問
- 21 総長一行がアイルランド国立大学ダブリン校を訪問
- 22 SDGs×北海道セミナー2024を開催
- 23 産学官ウェルネス推進プロジェクト「H-ARTs（ハーツ）」が「無料で健康チェック！」を実施
- 24 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 5名の研究者が講義を実施
- 26 「研究者のためのスキルアップセミナー⑪ プレゼン資料がわかりやすくなるデザイン4原則」を開催



スタートアップイベントHOKKAIDO INNOVATION WEEKにて学生企画「THE NORTHERN CHALLENGE 2024」を実施



国際連携機構リクルーティングオフィス キックオフシンポジウム～大学院留学生リクルーティング戦略と、証明書のデジタル化について考える～を開催

部局ニュース

- 27 文学研究院が書香の森展示スペースにて4本の企画展示を開催
- 28 先端生命科学研究院でFD研修及び総会2023を開催
- 29 令和6年度薬学実務実習開始セレモニーを挙
- 30 農学部が第39回あぐり大学「牛乳が固まる不思議、伸びる謎」を開催
- 31 スラブ・ユーラシア研究センターが「生存戦略」「ウクライナ」研究全体集会を開催
- 32 環境健康科学研究教育センターがフューチャー・アース日本ハブ集中会議2024を開催
- 33 北図書館で「外国語教育センター特別企画 外国語授業関連図書展示」を開催
- 34 附属図書館で「GitHubを使ってみよう！オンラインツール活用講習会」を開催

理事退任にあたって 35

定年を迎えるにあたって 37

表敬訪問 61

人事 62

- 62 新任教授紹介



総長一行が英国エジンバラ大学を訪問



SDGs×北海道セミナー2024を開催

表紙：総長一行が英国エジンバラ大学を訪問（関連記事20頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景④ 第一体育館（北17条西7丁目）

■全学ニュース

北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）の実施と合格者の発表

令和6年度一般選抜の前期日程試験は2月25日（日）・26日（月）に、後期日程試験は3月12日（火）に実施しました。
各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者5,196名のうち、本学が指定した大学入学共通テストの受験を要する教科・科目を受験していなかった無資格者5名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象者は5,191名で、受験者は5,028名でした。

合格者は2,048名で、合格発表は、3月6日（水）午前9時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が717名で全体の35.0%。卒業年度別では、令和6年3月高等学校卒業者が1,500名で全体の73.2%。また、男女別では女子が630名で全体の30.8%でした。

2. 後期日程

志願者4,286名のうち、本学が指定した大学入学共通テストの受験を要する教科・科目を受験していなかった無資格者5名を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象となった者は4,281名で、受験者は1,742名でした。

合格者は530名で、合格発表は、3月21日（木）午後4時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が64名で全体の12.1%。卒業年度別では、令和6年3月高等学校卒業者が357名で全体の67.4%。また、男女別では女子が114名で全体の21.5%でした。

（学務部入試課）

令和6年度一般選抜（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
総合入試	文系		95	330 (94)	11 (2)	319 (92)	3.4	106 (29)	
	理系	数学重点選抜群	133	349 (42)	10 (1)	339 (41)	2.5	137 (15)	
		物理重点選抜群	239	706 (112)	19 (2)	687 (110)	2.9	245 (24)	
		化学重点選抜群	240	569 (143)	8 (4)	561 (139)	2.3	249 (61)	
		生物重点選抜群	169	411 (174)	10 (4)	401 (170)	2.4	174 (74)	
		総合科学選抜群	253	616 (205)	23 (10)	593 (195)	2.3	261 (84)	
	文学部		118	294 (117)	5 (2)	289 (115)	2.4	122 (56)	
教育学部		20	46 (24)	0 (0)	46 (24)	2.3	20 (7)		
法学部		140	327 (131)	7 (4)	320 (127)	2.3	144 (64)		
経済学部		140	346 (85)	8 (2)	338 (83)	2.4	150 (39)		
学部別入試	医学部	医学科	85	295 (69)	20 (5)	275 (64)	3.2	89 (17)	
		保健学科	看護学専攻	60	133 (116)	10 (9)	123 (107)	2.1	67 (56)
			放射線技術科学専攻	28	119 (53)	3 (2)	116 (51)	4.1	36 (15)
			検査技術科学専攻	25	78 (54)	2 (2)	76 (52)	3.0	34 (24)
			理学療法学専攻	13	44 (13)	4 (2)	40 (11)	3.1	16 (4)
			作業療法学専攻	10	30 (15)	1 (1)	29 (14)	2.9	18 (7)
		歯学部	38	122 (53)	12 (5)	110 (48)	2.9	41 (18)	
	獣医学部		20	92 (53)	1 (0)	91 (53)	4.6	22 (14)	
	水産学部		105	284 (64)	9 (5)	275 (59)	2.6	117 (22)	
	計		1,931	5,191 (1,617)	163 (62)	5,028 (1,555)	2.6	2,048 (630)	

※ () 内の数字は女子で内数

令和6年度一般選抜（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
学部別入試	文学部	37	356 (122)	219 (83)	137 (39)	3.7	48 (13)	
	教育学部	10	78 (23)	47 (15)	31 (8)	3.1	13 (6)	
	法学部	40	475 (150)	283 (87)	192 (63)	4.8	47 (17)	
	経済学部	20	236 (33)	160 (24)	76 (9)	3.8	24 (5)	
	理学部	数学科	10	133 (7)	79 (3)	54 (4)	5.4	10 (0)
		物理学科	3	81 (9)	54 (5)	27 (4)	9.0	5 (0)
		化学科	20	173 (29)	108 (17)	65 (12)	3.3	20 (2)
		生物科学科 生物学専修分野	10	108 (49)	58 (24)	50 (25)	5.0	10 (5)
		生物科学科 高分子機能学専修分野	2	24 (8)	12 (6)	12 (2)	6.0	4 (0)
		地球惑星科学科	5	93 (19)	45 (8)	48 (11)	9.6	6 (0)
	薬学部	24	231 (90)	134 (48)	97 (42)	4.0	33 (13)	
	工学部	応用理工系学科	29	246 (26)	143 (14)	103 (12)	3.6	38 (4)
		情報エレクトロニクス学科	38	381 (24)	244 (14)	137 (10)	3.6	44 (3)
		機械知能工学科	25	291 (21)	184 (9)	107 (12)	4.3	28 (2)
		環境社会工学科	47	468 (73)	280 (40)	188 (33)	4.0	62 (7)
	農学部	53	400 (135)	233 (77)	167 (58)	3.2	61 (17)	
	獣医学部	15	115 (59)	42 (22)	73 (37)	4.9	15 (8)	
	水産学部	50	392 (90)	214 (43)	178 (47)	3.6	62 (12)	
	計		438	4,281 (967)	2,539 (539)	1,742 (428)	4.0	530 (114)

※ () 内の数字は女子で内数

フロンティア入試Type I 最終合格者の発表

令和6年度フロンティア入試Type I の最終合格者発表が2月13日（火）に行われ、27名が合格しました。

(学務部入試課)

令和6年度フロンティア入試最終合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍 率	第2次選考 合格者数	最終 合格者数
Type I	理学部地球惑星科学科	5	17 (4)	3.4	5 (0)	4 (0)
	医学部	5	9 (2)	1.8	2 (2)	1 (1)
	保健学科	7	4 (3)	0.6	2 (1)	2 (1)
	放射線技術科学専攻	7	2 (0)	0.3	0 (0)	0 (0)
	検査技術科学専攻	10	5 (4)	0.5	1 (1)	1 (1)
	理学療法学専攻	4	7 (2)	1.8	2 (0)	2 (0)
	作業療法学専攻	7	0 (0)	0.0	- -	- -
	歯学部	5	9 (4)	1.8	5 (2)	2 (1)
	工学部	4	6 (3)	1.5	4 (1)	2 (0)
	環境社会工学科 (社会基盤学コース)	4	4 (1)	1.0	3 (1)	2 (0)
Type II	水産学部	20	63 (12)	3.2	20 (2)	11 (0)
	小 計	78	126 (35)	1.6	44 (10)	27 (4)
	理学部	13	44 (23)	3.4	13 (7)	13 (7)
	物理学科	14	35 (13)	2.5	11 (3)	11 (3)
	化学科	11	35 (19)	3.2	11 (6)	11 (6)
	生物科学科 (高分子機能学専修分野)	3	9 (5)	3.0	1 (0)	1 (0)
	工学部	15	67 (25)	4.5	15 (5)	15 (5)
	機械知能工学科	5	21 (2)	4.2	5 (0)	5 (0)
	環境社会工学科 (環境工学コース)	5	15 (2)	3.0	0 (0)	0 (0)
	小 計	66	226 (89)	3.4	56 (21)	56 (21)
計		144	352 (124)	2.4	100 (31)	83 (25)

※ () 内の数字は、道内高校出身者で内数。

国際総合入試合格者の発表

令和6年度国際総合入試のうち、条件付合格者（国際バカロレア資格の取得を条件として合格していた者）の最終合格発表が2月13日（火）に行われ、11名が合格しました。

昨年12月7日（木）に発表された合格者と合わせ、最終合格者は13名となりました。

（学務部入試課）

令和6年度国際総合入試合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	合格者数 (条件付合格者含む)	最終合格者数
総合入試	文系	5	10 (8)	2.0	5 (3) [4 (2)]	3 (3)
	理系	10	27 (17)	2.7	10 (7) [9 (6)]	10 (7)
計		15	37 (25)	2.5	15 (10) [13 (8)]	13 (10)

※ () 内の数字は、女子で内数。

※ [] 内の数字は、条件付合格者数で内数。

令和5年度「北海道大学総長表彰」表彰式を挙

2月27日（火）、「教育研究総長表彰」表彰式が執り行われ、関係者列席のもと、寶金清博総長から被表彰者に、表彰楯及び報奨金（目録）が授与されました。

教育研究総長表彰は、教育活動及び研究活動を通し、特に優れた功績をあげた教員を顕彰することにより、本学の活性化と更なる発展に資することを目的としたものです。

なお、この度表彰を受けられた方々は、下記のとおりです。

（総務企画部人事課厚生労務室）



寶金総長による挨拶



総長、理事、受賞者及び部局長との記念撮影

教育研究総長表彰

区分	所 属	氏 名
教育	理学研究院	伊 藤 秀 臣
教育	メディア・コミュニケーション研究院	楊 彩 虹
教育	工学研究院	川 村 洋 平
教育	獣医学研究院	奥 村 正 裕
教育	文学研究院	加 藤 重 広
教育	文学研究院	川 口 暁 弘
教育	北方生物圏フィールド科学センター	河 合 正 人
研究	創成研究機構ワクチン研究開発拠点	澤 洋 文
研究	工学研究院	PARK ILHWAN
研究	創成研究機構化学反応創成研究拠点	田 中 伸 哉
	医学研究院	
研究	医学研究院	須 田 剛 生
研究	歯学研究院	渡 邊 裕
研究	スラブ・ユーラシア研究センター	WOLFF DAVID

博士学生支援プログラム採択学生向け確定申告セミナーを開催

2月2日（金）、博士学生支援プログラム採択学生向け確定申告セミナーを開催しました。

北海道大学の「DX博士人材フェローシップ」や「アンビシャス博士人材フェローシップ」といった、博士学生支援プログラムに採択された学生に支給される研究奨励費や研究専念支援金は雑所得として課税の対象となるため、確定申告が必要となります。

今回のセミナーは、田中将太郎公認会計士・税理士事務所代表の田中将太郎氏と同事務所の巽 玲奈氏をお招きして、確定申告の概要及び確定申告に必要な知識等を実践形式で紹介していただきました。本制度の内容や特徴を組み入れたオリジナルの講演内容で、視聴学生から寄せられた多くの質問にも丁寧に回答をいただき、確定申告への理解を深めることができました。

当日のYouTubeライブ配信は日本語で行いましたが、セミナーの中で、国税庁のホームページに掲載されている、複数の言語に対応したマニュアルを紹介するなど、留学生のニーズにも対応しています。

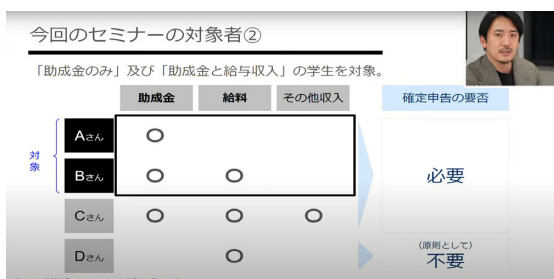
（学務部学務企画課）

日 時：2024年2月2日（金）17:00～18:00

会 場：YouTubeライブ配信*

講演者：田中将太郎公認会計士・税理士事務所 代表 田中将太郎 氏
同事務所 巽 玲奈 氏

※確定申告期間中、オンデマンド配信をELMS上に掲載



田中氏によるセミナーの様子



巽氏によるデモンストレーションの様子



質疑応答の様子



左から講演者の田中氏、巽氏

令和5年 北大ペンハロー賞授与式を挙行

2月15日（木）、エスコンフィールド HOKKAIDOにおいて、令和5年北大ペンハロー賞の授与式を行い、山口淳二理事・副学長から賞状の授与と記念品が贈呈されました。

北大ペンハロー賞は、平成17年度か

ら開始され、本学学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、都道府県規模の競技会・コンクールで優勝するなど、高い評価を受けた学生団体等を表彰する制度です。

今回は、5団体、5個人が受賞しまし

た。今回までで、180団体、517個人の計697件が授与されています。

（学務部学生支援課）



授与式での記念写真

北海道内のIT企業による留学生向け合同説明会 「HOKKAIDO IT JOB FAIR」を開催

キャリアセンターでは、2月2日（金）に北海道・札幌市と株式会社北海道アルバイト情報社との共催による留学生のための合同企業説明会「HOKKAIDO IT JOB FAIR」を開催しました。

この合同企業説明会は、昨年度は学外で開催しましたが、今年度は学内での開催となりました。

当日は合同企業説明会の開催に先立ち、参加の仕方について説明する軽食付きの事前セミナーを開催したほか、

留学生の就職に関する悩みをサポートするため、行政書士によるビザ相談ブースや札幌新卒応援ハローワークによる就活相談ブースを会場に設けました。

合同企業説明会には17社のIT企業と33名の留学生が参加し、半数以上の学生が4社以上の企業ブースを回って話を聞いていました。

企業からは「優秀な外国人留学生と交流ができた」「意欲的に様々なことを聞きに来る学生が多い印象を受けた」「日本語を話す学生も多く、採用

のハードルが下がった」

学生からは、「詳しい情報を得る貴重な機会だった」「新しい会社を知ることができた」「このような機会が少ないのでありがたい」などの声がありました。

学内で、留学生と多くのIT企業が一度に出会える貴重な機会となったため、今後も継続して開催したいと考えています。

（学務部キャリア支援課）



事前セミナーの様子



会場内の様子

高橋理事・副学長がアジア大学フォーラムに出席

1月27日（土）及び28日（日）に、科学技術振興機構（JST）及び中国国際人材交流協会（CAIEP）の共催により、アジア大学フォーラムが香港で開催され、高橋 彩理事・副学長が出席しました。アジアにおける経済・科学技術を先導する大学等が一堂に会し、今後に向けて意見交換を行い、域内の大学等が連携して共通の課題に取り組む場として行われた本フォーラムには、日本から10大学、中国から11大学、ASEANから8大学が参加しました。

フォーラムは、「アジアにおける人材育成・確保及びイノベーションと発展の促進」をテーマに、主催者による挨拶と7大学の代表者から各大学を紹介する基調講演の後、3グループに分かれて円卓会議が行われました。円卓会議では高橋理事・副学長が登壇し、人材育成の取組事例として、海外の学生との共修プログラム等について発表を行いました。他大学の代表者からもそれぞれ特色ある取組について紹介があり、活発な議論が繰り広げられま

した。

また、フォーラム開催の機会をとらえて実施された「日本-ASEAN大学交流会」及び「日本-中国大学ミーティング」では、大学間の連携促進に向けた提案や本フォーラムでの議論の共有等が行われました。

本フォーラム開催が、アジア地域の更なる連携強化の契機になることが期待されます。

（国際部国際連携課）



集合写真（JST提供）



円卓会議で発表を行う高橋理事



円卓会議（JST提供）

サブリ・キチマリ駐日コソボ共和国大使による講演会を開催

2月5日（月）、サブリ・キチマリ駐日コソボ共和国大使をお迎えし、学术交流会館にて、「コソボ共和国、欧州連合への道（Kosovo's Way to the European Union）」をテーマに講演会を開催しました。

本講演会には、本学教職員、新渡戸カレッジ生をはじめとする学生が来場し、会場及びオンラインを合わせ約50名が参加しました。

講演会は、スラブ・ユーラシア研究センターの協力のもと開催され、同センターの宇山智彦教授によるキチマリ大使及びコソボ共和国の紹介の後、大使から、コソボ共和国の歴史、EU加盟に向けた動き、日本によるコソボ共和国への協力や支援への感謝などについて講演が行われました。講演後の質疑応答では、参加者から「同国のEU加盟へのハードル」「日本に期待する

こと」などについての質問があり、盛会となりました。

講演会前後には、寶金清博総長、スラブ・ユーラシア研究センターでの宇山教授、田畑伸一郎名誉教授との懇談が行われ、両国の今後の交流に関する意見交換が行われました。

（国際部国際連携課）



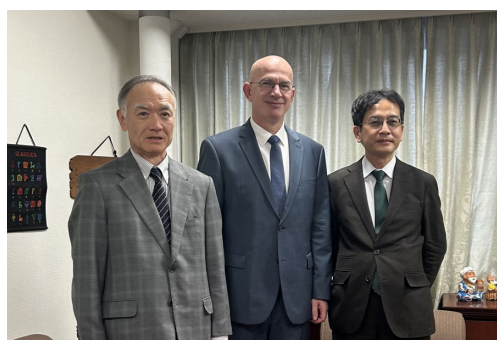
講演を行うキチマリ駐日大使



スラブ・ユーラシア研究センターの宇山教授による司会



寶金総長とキチマリ駐日大使のギフト交換の様子



スラブ・ユーラシア研究センターでの記念写真

令和5年度 第9回定例記者会見の開催

2月15日（木）、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けて分かりやすく発信することを目的とした「定例記者会見」を開催しました。

公共政策学連携研究部教授で広報・社会連携本部の山崎幹根総長補佐の進行のもと、SDGs統括の横田 篤理事・

副学長、北方生物圏フィールド科学センターから森林圏ステーション長の揚妻直樹教授、森林圏ステーション北管理部長の吉田俊也教授、サステナビリティ推進機構サステナブルキャンパスマネジメント本部の北岡真吾特任准教授が発表を行いました。北海道教

育庁記者クラブ加盟社等から3名の参加がありました。

発表内容は以下のとおりです。

（社会共創部広報課）

発表事項（発表者）

- ・生物多様性保全と気候変動対策の統合的解決に向けた北海道大学の取組
～雨龍研究林が自然共生サイトに認定～

（理事・副学長（SDGs統括）横田 篤、

北方生物圏フィールド科学センター 教授・森林圏ステーション長 揚妻直樹、

北方生物圏フィールド科学センター 教授・森林圏ステーション北管理部長 吉田俊也、

サステナビリティ推進機構サステナブルキャンパスマネジメント本部 特任准教授 北岡真吾）

※発表資料掲載URL

<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/gov/org/pr/press-conference/R5.html>



発表の様子



発表する横田理事・副学長



質疑応答の様子



当日の発表者と司会を務めた公共政策学連携研究部教授の山崎総長補佐（広報・社会連携本部）（左から山崎総長補佐、北岡特任准教授、横田理事・副学長、揚妻教授、吉田教授）
※写真中央の横田理事・副学長が手にしているものは、自然共生サイトの「認定証」

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をするとしています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	(1月31日現在)	46,741件	6,934,871,979円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	(1月31日現在)	9,381件	694,408,422円

ご寄附状況

1月は272件18,252,956円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。
(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名（法人等）

岩倉建設株式会社、北日本精機株式会社、株式会社キットアライブ、KKR札幌医療センター、建築工学科26期有志、サムワン、ダビスタ株式会社、名寄市立総合病院、日本製鋼所M&E株式会社、医療法人社団北秀会、北大全学教育基礎科目教科書『地球惑星科学入門』著者一同、株式会社北陸銀行、北海道オフィス・システム株式会社、社会保険労務士法人北海道賃金労務研究所、ロックメディカル株式会社

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	青木 貴徳	赤平 幸郎	明楽 浩史	浅沼 静華	浅野 賢道
愛宕 義浩	阿部 雅史	飯村 泰昭	石井 翼	石井 哲夫	石垣 隆弘	石黒晋太郎	市坂 有基
井出 肇	伊藤 大貴	伊藤 雄三	猪股 路子	井原 遊	今井 晋	入江 隆幸	入澤 秀次
上田 雅敏	上野 一義	臼井 梨恵	梅本 由佳	江野 英嗣	縁記 和也	遠藤 公憲	大柏 秀樹
大川 裕貴	大西 匡	大原 正範	大山 暁男	岡本智津子	沖崎 遼	小木 聡	尾崎 毅
小田原一史	小原 大和	小柳 毅	片平 忠志	加藤 真子	加藤 伸康	加藤 裕貴	金川 眞行
河合 透	川嶋 利瑞	河本 充司	岸 和弘	衣川 暢子	木村 祐介	清塚 雅彦	久野 智子
倉島 庸	栗原 誠治	上月 浩	小林 賢人	齊藤 慈円	齊藤 晋	齋藤 貴子	齋藤 久
齋藤 悠城	境 政人	坂本 大介	崎元 大志	佐藤貴美子	佐藤 昇志	三升畑元基	志済 聡子
七戸 俊明	篠崎 裕久	清水 裕樹	白石由美子	新宮 康栄	菅原 新也	杉江 和男	杉本 聡
杉山 正	鈴木 敬二	鈴木 貴之	関上 隆	関根 史明	瀬戸口 剛	瀬名波栄潤	高岡 健仁
高瀬登志彦	高橋 英之	高村 圭一	高柳 涼	滝口 満喜	田栗 和奈	武政 栄治	竹本 良嬉
田中 晋吾	玉城 英彦	田村 悠	竹馬 俊介	辻井 正人	土家 琢磨	坪田 敏男	寺澤 睦
徳田 昌生	豊田 威信	中沢 功	中村 鎮雄	中村 均	庭野 陽樹	根本 叔治	野村 竜司
萩原 寛司	黒岩 麻里	花田 秀一	羽成 達幸	深田 直之	福島 善司	福士 幸治	福永 悟郎
藤澤 裕子	藤田 篤	舩津 保浩	古川夕里香	細田 朋彦	本田 孝雄	真栄城正寿	松井 彰
松井 耕二	松永 権介	松原 謙一	松本 高志	松本 嶺	三木 證永	南 昭彦	南田 大朗
南 洋志	壬生 篤志	宮入 貞徳	宮田 信幸	宮本 亮	村上 泰一	村瀬徳啓充	村瀬 亮太

村武 直樹
吉田 広志

森岡 伸
若狭 哲

森松 正美
分島 亮

安田 準
渡部 克将

山口 淳二

山城 茂人

横山 考

吉岡 毅

<感謝状の贈呈>



柏木道彦様（令和6年1月10日）



濱野建材店様（令和6年1月16日）



真屋幹雄様（令和6年1月26日）

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年8～9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff>

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

（社会共創部広報課）

高等教育推進機構国際教育研究部で「第3回北海道地域日本語教育シンポジウム『まるごと北海道+沖縄 わいわい考える多文化共生のイマ』」を開催

高等教育推進機構国際教育研究部は、1月27日（土）に第3回北海道地域日本語教育シンポジウム「まるごと北海道+沖縄 わいわい考える多文化共生のイマ」を実施しました。本シンポジウムは、超広域自治体である北海道で日本語学習支援や多文化共生の取り組みを行う個人・団体・自治体を対象とし、多文化共生・日本語教育に係る最新の施策情報及び各現場の実情を伝えること、そして参加者の間にゆるやかな繋がりを作ることを目的としています。国際教育研究部では、本学と北海道との包括連携協定のもと、2022年4月より北海道総合政策部国際局国際課（以下「北海道国際課」）と連携し、北海道の多文化共生及び地域日本語学習支援に係る諸事業を推進していますが、本シンポジウムはこの事業の一部として実施しているものです。第3回のシンポジウムは、北海道国際課に加え、JICA北海道、キャリアバンク株式会社が共催に、技能講習・特定技能の受入れを進める株式会社グリーンズ北見、株式会社久恵比寿が協賛と

なり実施されました。

本シンポジウムは、超広域自治体である北海道各地域の方が無理なく参加できるよう、オンライン配信で行っていますが、それと同時に、オンライン参加が困難である方、他の参加者と繋がりを作りたい方のために、道内各地域にサテライト会場を設け、対面での参加も受け入れています。今回は、キャリアバンク株式会社本社より配信を行うとともに、JICA北海道及び各地域の国際交流協会の協力のもと、函館・旭川・帯広・釧路・北見の5都市にサテライト会場を設置しました。

シンポジウム第1部では、北海道国際課より2023年度から開始された北海道地域日本語教育推進事業について、外国人技能実習機構札幌事務所より変わりゆく技能講習制度について最新情報が共有されるとともに、北海道で最も早くから国際交流事業を行ってきた一般社団法人北海道国際交流センターより活動継続のための工夫が説明されました。第2部では、介護、酪農など外国人労働者を受け入れる団体・企業

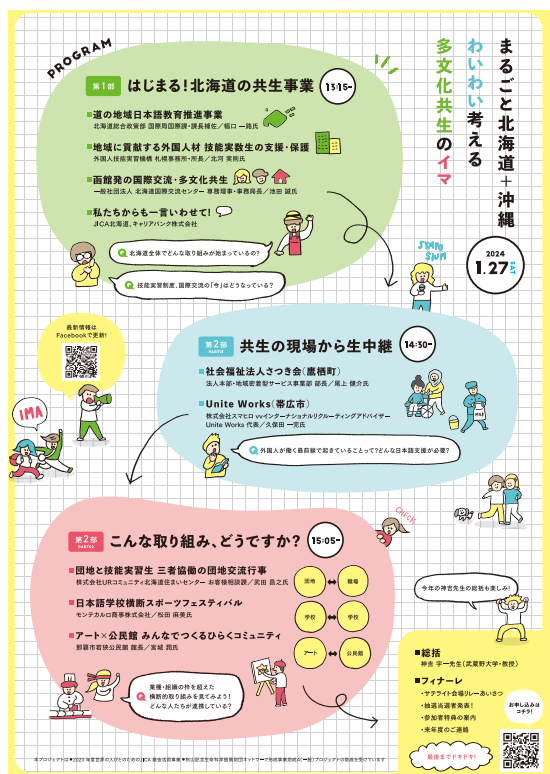
から現場の率直な声を聞き、さらに共生支援に取り組む株式会社URコミュニティ、モンテカルロ商事株式会社、そして沖縄那覇市の若狭公民館から、多様化する地域の課題と、住民間の交流及び相互理解を促進するためのユニークな活動を紹介してもらいました。

当日は、道内外から定員（200名）を上回る211名（オンライン151名、サテライト会場60名）が参加し、盛況のうちにシンポジウムを終えることができました。事後のアンケートの自由記述欄では、シンポジウムにより最新の情報を得ることができたという声とともに、地域で取り組みを行ううえでの悩みも多く書かれており、外国人住民が急増する各地域で、支援者の方々が孤軍奮闘している様子が伝わってきました。今後も各地域の支援者と情報を共有するため、さらに支援者間のネットワーク構築を促進するため、継続的にシンポジウムを実施していきたいと思います。

（高等教育推進機構）



開催告知ポスター・表面



開催告知ポスター・裏面

スタートアップイベントHOKKAIDO INNOVATION WEEKにて 学生企画「THE NORTHERN CHALLENGE 2024」を実施

1月29日（月）～2月2日（金）、産学・地域協働推進機構は、北海道・北海道経済産業局・札幌市の3行政機関が連携し北海道のスタートアップ・エコシステム構築を推進するSTARTUP HOKKAIDO実行委員会と共に、初開催となる国際スタートアップ・カンファレンス「HOKKAIDO INNOVATION WEEK」を実施しました。

当イベントは北海道におけるグローバルなスタートアップ・エコシステム構築を目的として行われ、北欧を中心とする国内外のスタートアップ、投資家、支援機関や自治体などから延べ約1,000人が参加しました。そのサイドイベントとして、学生団体HUB（「世

界から北海道へユニークな人が集まり、北海道から世界へアイデアが飛び立つ。」をビジョンに活動する北海道に拠点を置く学生を中心とした団体。HOKKAIDO UNIQUE BASEの略）がメインとなり「THE NORTHERN CHALLENGE 2024」と題して、ITエンジニアやデザイナー等でチームを構成し、特定のテーマについて意見やアイデアを出し合い、アプリケーションやサービスを開発し、その成果をピッチという形で発表し競うイベントハッカソンを実施しました。

参加者は、スタートアップの本場であるエストニアの若手起業家コミュニティStartup Wise Guysによるメンタリ

ングや、GAFA出身のエンジニアなどが所属するE-learningのプラットフォームFox academyから技術面のアドバイスを受けるなどし、実践的かつグローバルな視点でスタートアップについて学びを深めました。最終的には、競争を勝ち抜いた8チームが現役の投資家が務める審査員へ向けてピッチを行い、優勝者を決定しました。

イベントは盛会のうちに終了いたしました。優勝チームは、今後も引き続き投資家からのアドバイスを受け、ビジネスプランのブラッシュアップを続ける予定です。

（産学・地域協働推進機構）

イベント実施内容

日時：令和6年1月30日（火）16:00～21:00
参加：選抜された8チーム（大学生・大学院生、一般）
会場：Deep Tech CORE
（〒060-0005 札幌市中央区北5条西5丁目1-5JR 55SAPPORO 8F）
使用言語：英語・日本語



当日の様子



HUBメンバー



ミーティング



ピッチをしている様子

nano tech 2024で最新のナノテク研究成果をアピール！

産学・地域協働推進機構は、1月31日（水）～2月2日（金）に東京ビッグサイトで開催されたnano tech 2024に出展しました。

この展示会は、「未来のビジネスを拓く」をテーマに開催され、来場者は幅広い産業分野におけるR&D（Research & Development）関係者が占めることから、研究開発に直接関わる方々へ研

究成果をアピールすることができ、新規市場開拓や新規事業のパートナー獲得に最適な展示会となっています。

当機構のブースでは、6つのnano tech関連シーズを展示しました。

今年度の全来場者数は、42,034人と前年を上回る来場者数となり、大盛況のもと、北大ブースでは研究者による技術紹介やサンプルデモ展示を行い、

多くの共同研究等に関する具体的な相談が行われました。

産学・地域協働推進機構では、今後も研究成果の社会実装を目的に、民間企業等との様々なマッチングの企画を行いながら、産学連携活動を推進していきます。

（産学・地域協働推進機構）

1. 「二次リン資源中のリンの選択的回収技術」

工学研究院 附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センター 坪内直人准教授

2. 「亜鉛空気二次電池のための空気極触媒の開発」

工学研究院 応用化学部門 幅崎浩樹教授・北野 翔特任助教

3. 「低温焼結性銅微粒子システム」

工学研究院 材料科学部門 米澤 徹教授

4. 「革新的蓄熱マイクロカプセル “h-MEPCM”」

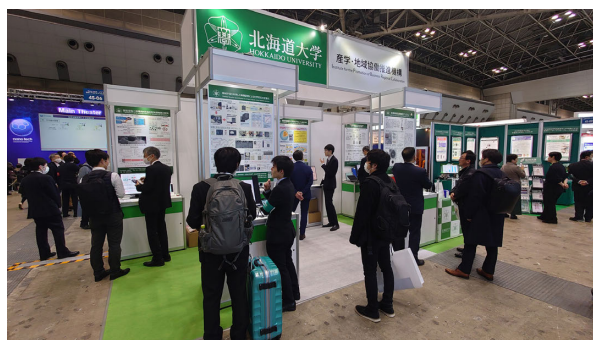
工学研究院 附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センター 能村貴宏准教授

5. 「機械学習を利用した画像診断による化学反応の定量化」

工学研究院 応用化学部門 猪熊泰英教授

6. 「加水分解酵素を用いたメゾスコピック粒子の作成法、および一重項酸素生成メゾスコピック粒子」

電子科学研究所 フォトニックナノ材料研究分野 高野勇太准教授



産学・地域協働推進機構ブースの様子

PIZZERIA DEL CAPITANOとのコラボレーションにより小中学生向けアントレプレナーシップ教育プログラム「チャレンジ・ピッツァ」を実施

産学・地域協働推進機構では、2月12日（月・祝）に「チャレンジ・ピッツァ～ピザ屋さんの経営を通じてビジネスを美味しく学ぼう～」を実施しました。チャレンジ・ピッツァは、北海道大学の学生が開発した創造性・主体性を育みながら、ビジネスを学ぶことができるカードゲームで、小中学生を対象としたアントレプレナーシップ教育プログラムです。参加者はピザ屋になりきって、材料の仕入、製造、販売を行い、ビジネスを学びながら様々な社会課題や経営課題の解決を目指し

ます。

本プログラムは、地域の人気店である「PIZZERIA DEL CAPITANO」様にご協力いただきながら開催し、募集人数を上回る応募があり、16名が参加しました。参加者はゲームを楽しみながら課題解決に挑戦し、ビジネスの仕組みを学習しました。また同店の店員から指導を受け、ピザ作りを体験するとともに、ピザ屋や仕入先の農家の経営について講義を聞き、ビジネスへの理解を深めました。

プログラム実施後、参加者からは

「ゲームを通じてビジネスを学べたことで理解が深まった」「現役のピザ屋さんの話を聞く機会は無かったので、貴重な経験になった」などの感想が寄せられ、有意義な機会を提供することができたと考えます。

産学・地域協働推進機構では、引き続きこのようなアントレプレナー教育を展開してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

イベント実施内容

日 時：令和6年2月12日（月・祝）10:00～14:00
定 員：15名（先着順）
対 象：小学3年生～中学生
会 場：恒志堂円山ビル（北海道札幌市中央区大通西22丁目1-1）
主 催：北海道大学 産学・地域協働推進機構



ゲームをする様子



講義の様子



焼きたてのピザを食べる様子



表彰の様子

国際連携機構リクルーティングオフィス キックオフシンポジウム～大学院留学生リクルーティング戦略と、証明書のデジタル化について考える～を開催

国際連携機構では、大学院留学生リクルーティングを目的として、令和5年4月に「国際連携機構リクルーティングオフィス」を設置しました。この度、当該オフィスの設置を記念し、1月30日（火）、31日（水）の2日間、学術交流会館において、キックオフシンポジウムを開催しました。

初日は、国内外のリクルーティング関係及び国際入試の専門家による講演を行いました。初めに、寶金清博総長及び文部科学省留学生交流室の高木歩室長補佐から開会挨拶があった後、第1部として、高橋 彩理事・副学長及び三代川典史リクルーティングオフィス長により、北海道大学における留学生リクルーティングの取り組みについて講演がありました。その後、第2部では「大学院留学生リクルーティングの先進事例を知る」として、京都大学国際戦略本部ASEAN拠点長の縄田栄治氏（オンライン登壇）、オーストラリア・マードック大学リージョナルマネ

ジャーのネヴィル・ヒョング氏、そして沖縄科学技術大学院大学（OIST）研究科アドミッション・アウトリーチセクションマネジャーのグスマン勇気氏の3名から各大学の留学生リクルーティングに関する取り組みについて紹介がありました。続いて、第3部「世界のデジタル証明書活用事例に学ぶ」では、フィンランド・ヘルシンキ大学アドミッションズスペシャリストのエミ・ペルトネン氏、ヤニ・アフティアイネン氏（オンライン登壇）から、フィンランド及び世界のデジタル証明書の活用事例の紹介がありました。

2日目は、前日のシンポジウムでの講演内容も踏まえ、日本各地から集まった参加者間で、リクルーティング活動の悩みや今後の戦略について議論を行いました。

初日のシンポジウム終了後には、ネットワーキングイベントも開催し、普段あまり集まる機会のない国内大学のリクルーティング担当者が対面による

交流を行いました。今後、日本全体として優秀な留学生を獲得していくためのネットワークを構築する、重要な機会となりました。

今回のシンポジウムでは、オンライン配信も活用することで、40を超える国内大学・高等教育関係機関から参加者267名が集まり、大変盛況のうちに閉会しました。また、QRコードを使った参加受付、対面参加者・オンライン参加者が一緒に同じプラットフォームで質問ができるオンライン質問システムの利用など、DXの観点でも先進的なシンポジウムとなりました。

リクルーティングオフィスでは、今回のシンポジウム開催で獲得したネットワークを拡大させ、北海道大学のプレゼンスを高めていくとともに、北海道大学全体で効率的・効果的に留学生リクルーティングが実現するよう、様々な活動を展開していきます。

（国際連携機構）



開会挨拶を行う寶金総長



三代川リクルーティングオフィス長による北海道大学の留学生リクルーティング戦略に関する講演



グスマン氏によるOISTにおける博士課程学生のリクルーティング活動に関する講演



2日目は前日の講演者（写真左はマードック大学ヒョング氏）を含めたディスカッションを実施

総長一行が英国エジンバラ大学を訪問

2月19日（月）、主として獣医学部・獣医学院・国際感染症学院で学生交流を行ってきた、英国エジンバラ大学を資金清博総長一行が訪問しました。エジンバラ大学は英国大学研究評価（Research Excellence Framework；REF）で9割以上の研究活動が世界最高峰と評され、特に医学・獣医学において評価の高い大学です。本学では2018年より「国際獣医師人材を育成する獣医学教育世界展開プログラム」に係る学生の相互派遣を行ってきたほか、同大学地球科学院、脳科学研究センター、細胞生物学研究所、医学研究所との研究連携が生じています。

本学から資金総長、農学研究院の岩淵和則教授・総長補佐、人獣共通感染症国際共同研究所の鈴木定彦教授（卓越教授）、公共政策大学院の山崎幹根教授・総長補佐、秦 絵里国際部長、国際連携機構の植村妙菜学術専門職の6名が、同学執行部、王立（ディック）獣医学部、ロスリン研究所、生物科学部、地理科学部、理工学部を訪問し、研究者との打ち合わせを行いました。

プロボストのキム・グラハム教授、国際担当副学長相当のアラン・マッケイ氏との会談では、獣医連携についての意識が示され、同学の欧州研究大学連携と過去10年で様変わりした国際連携地図、海外キャンパスを持たずとも同等程度の国際性と研究成果を戦略的連携先との協働から得られるという自負、スコットランド政府及び地域コミュニティからの同大学への求めと研究イノベーション戦略、社会的インパクトの創出に係る研究大学への期待、政府の各種評価に対応する事務的負荷等、幅広い話題が語られました。

王立（ディック）獣医学部には学生交流のみならず、本学獣医学教育が、2019年12月に欧州獣医学教育機関協会（European Association of Establishments for Veterinary Education；EAEVE）による認証を取得する際にも協力を得ています。今般は、リサ・ボーデン獣医学部長、ジェイン・ホープ教授（免疫学）、国際担当のアンディ・ホプカー博士に迎えられ、ニコラ・アーンショウ博士から両校の学生

交流について、ジェフ・シム教授から国際農業・食品システム学院について、アレックス・コービシュリー博士から同学獣医教育プログラムについて、それぞれ紹介がありました。本学・鈴木教授からは、人獣共通感染症国際共同研究所とワクチン研究開発拠点の説明があり、特にロスリン研究所のマーク・スティーブンス教授（微生物発病学）と今後の共同研究シーズを探ることとなりました。

臨床脳科学センターのジョアナ・ワードロウ教授、ポール・ブレナン博士からは、脳外科手術の見学を含む学生来訪を歓迎する旨が示されました。英国バイオ炭研究センターで、温室効果ガス排出量ゼロを目指すオンドレイ・マシエク教授、ミトコンドリア生物学のアヒム・シュナウファー教授、理工学部の国際担当教員であるニール・ロバートソン教授との会談も経て、両校の共通の研究関心テーマの多さ、連携の可能性を認識する訪問となりました。

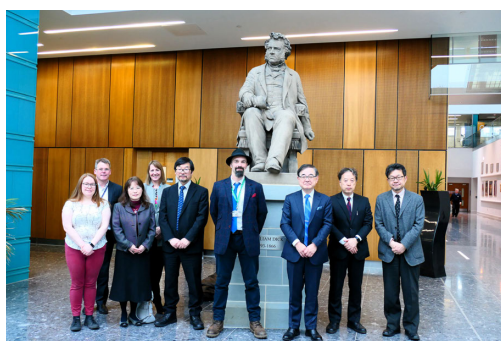
（国際連携機構）



資金総長とプロボストのグラハム教授



資金総長とボーデン獣医学部長



王立（ディック）獣医学部のディック像前で



北大卒のマシエク教授と

総長一行がアイルランド国立大学ダブリン校を訪問

2月20日（火）・21日（水）、国際連携研究教育局（GI-CoRE）、ワクチン研究開発拠点（IVReD）、公共政策大学院で10年来研究教育連携を行ってきたアイルランド国立大学ダブリン校（University College Dublin、以下「UCD」）を寶金清博総長一行が訪問しました。アイルランドは北海道と同等規模の面積、人口で構成されますが、UCDは同国において学生数でも研究論文数でも最大規模を誇る大学で、同国トップ大学のダブリン大学トリニティ・カレッジ（以下「TCD」）とは研究強化・人材育成の住み分けを行い、獣医・看護学はUCD、歯学・薬理学はTCDが担っています。本学では、公共政策の学生派遣を行う「シャムロック・プログラム」、公共政策大学院と国際感染症学院で2度共同採択されているEU助成金事業「エラスムス+」による人的交流、GI-CoRE及びIVReDでのUCD教員のクロスアポイントメントを経て、過去5年で100本近い共著論文を生む研究グループを輩出した強固な連携関係が確立されています。

本学から寶金総長、農学研究院の岩渕和則教授・総長補佐、人獣共通感染症国際共同研究所の鈴木定彦教授（卓

越教授）、公共政策大学院の山崎幹根教授・総長補佐、秦 絵里国際部長、国際連携機構の植村妙菜学術専門職の6名は、既存連携先であるギアリー公共政策研究所、社会政策・ソーシャルワーク・社会正義学院、獣医学院で迎えられ、それぞれこれまでの連携を振り返り、今後の継続連携可能性を話し合いました。公共政策においては、ジェンダー等高まりを見せている共通関心への探求可能性が、獣医においては両校を知る博士学生、若手研究者の共同育成への期待が示され、また、UCDが米国カリフォルニア大学デービス校（University of California, UC Davis, UCDとも）と進める「UCD2 Transatlantic One Health Alliance（UCD二校による大西洋横断ワンヘルス連合）」が紹介されました。

翌21日には、オーラ・フィーリー学長、ドロレス・オリオーダン国際連携担当副学長、ショーナ・ヒューズ国際部長他、本学にもアポイントされているウィリアム・ホール医学名誉教授、獣医学院のステイブン・ゴードン教授、社会政策・ソーシャルワーク・社会正義学院の小舘尚文准教授の見守のもと、両校が大学間レベルで締結する

学術交流協定更新の署名が行われました。また、今後の連携可能性を探るべく、医学院のパトリック・マロン教授（微生物疾患）、農学・食品科学院のフランク・モナハン学院長、牧草飼育プロジェクトを担うヘレン・シェリダン准教授、コミュニティ連携事業「マッピング・グリーン・ダブリン」を取りまとめた社会科学・法学部のニーヴ・ムーア・チェリー学部長、UCDエネルギー研究所及びUCD地球研究所に関わる、情報科学院のエレーニ・マンギナ教授、エマ・ソケル教授・物理学科長、UCD食と健康の研究所を立ち上げたアイフリク・オサリヴァン教授との打ち合わせを行いました。最後に、国立検査機関となっているUCDのナショナルウイルスリファレンスラボラトリー（National Virus Reference Laboratory, NVRL）と試験の病原体宿主研究センターを見学し、また、丸山則夫駐アイルランド日本国大使との懇談を経て、1日半の訪問を終えました。5月にはUCDから複数名の教員が本学を来訪予定です。

（国際連携機構）



UCD執行部及び関係者と



寶金総長とフィーリー学長



獣医での打ち合わせ



丸山駐アイルランド日本国大使と

SDGs×北海道セミナー2024を開催

北海道、JICA北海道及び北海道大学は、「SDGs×北海道セミナー2024」を1月22日（月）に学術交流会館及びオンラインで開催し、本学の学生、教職員を含む一般市民約154名（会場22名・オンライン132名）の方々の参加がありました。

セミナーは、北海道総合政策部計画推進課の佐々木敏課長が司会進行を務め、最初に、北海道総合政策部計画局の笠井敦史局長とJICA北海道の阿部裕之所長が開会挨拶をされた後、株式会社ウエカツ水産の上田勝彦代表取締役が「海・人・魚が共に生きる条件を考える～日本の水産業における持続性と非持続性～」をテーマに基調講演

を行いました。上田代表取締役は、水産業の持続性を考える上で生態学・経済学・社会学の3つの視点が重要であることを、図解しながら説明しました。

続く「SDGsに関する取組発表」ではJICA海外協力隊の経験者である村上万龍氏、国際食資源学院博士後期課程2年の菅野隼人氏、水産科学院博士後期課程1年の小南彩夏氏及び北海道剣淵高校の生徒4名が発表を行いました。

その後、「いつまでも美味しく水産資源を食べ続けられる未来とは」をテーマにパネルディスカッションが行われました。

ディスカッションでは、サステナビリティ推進機構の加藤 悟教授が

ファシリテーターとなり、上田代表取締役と取組発表者が参加して、水産資源を活用していくための、消費者意識への働きかけの重要性などについて議論が交わされました。

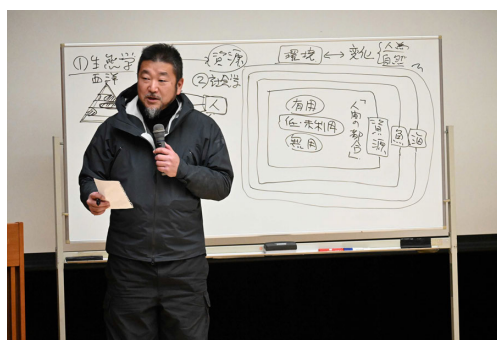
最後に先端生命科学研究院教授の出村 誠総長補佐が閉会挨拶を行い、盛会の内にセミナーを終了しました。

サステナビリティ推進機構は、今後も学外のステークホルダーと連携し、「持続可能な社会」の実現に繋がる教育・研究の取組・発信を進めていく予定です。

（サステナビリティ推進機構）



司会進行を務める佐々木課長



ホワイトボードを使い基調講演を行う上田代表取締役



オンラインを併用して行われたパネルディスカッションの様子



閉会挨拶を行う出村総長補佐・教授

産学官ウェルネス推進プロジェクト「H-ARTs（ハーツ）」が「無料で健康チェック！」を実施

サステナビリティ推進機構SDGs事業推進本部、保健科学研究院、株式会社アークス、株式会社ラルズ、株式会社ツルハ及び札幌市の5者が進めるウェルネス推進プロジェクト「H-ARTs（ハーツ）」は、2月4日（日）にスーパーアークス北24条店にて「無料で健康チェック！」を実施しました。

「無料で健康チェック！」は、「楽しく健康チェックができる環境と、健康について気軽に学ぶことができる機会づくり」を目的として2023年に開始し

たプロジェクトで、これまでにスーパーアークス北24条店及びNoMaps2023 WELLNESSチ・カ・ホ会場において開催し、延べ600名以上の一般市民の方々に参加いただいています。

本年1回目となる今回の開催では、第一生命保険株式会社、株式会社第一生命経済研究所と北海道コカ・コーラボトリング株式会社のご協力と、市内の複数大学から5名の学生ボランティアに運営のお手伝いをいただいて、「脳年齢測定」、「血管年齢測定」、「骨健

康度測定」のほか、「乳がん予防セミナー」や「乳がん触診モデルの体験と自己触診の解説」、「免疫ケア商品の試飲提供」を行い、約150名の方々に参加いただきました。

今後は、健康チェックのほか、開催回ごとに「高齢ドライバーの健康維持」「野菜摂取不足の解消」等のテーマを設け、企業・団体と連携しながらセミナーや講習会を行う予定です。

（サステナビリティ推進機構、保健科学研究院）

【今後の開催予定】

5月19日（日） テーマ「高齢ドライバーの健康維持・事故防止（仮）」

協力：NPO 法人グッドドライバー・レッスン 他

8月18日（日） テーマ「野菜摂取不足の解消（仮）」

協力：キュービー株式会社 他

10月20日（日） テーマ「アンチエイジング（仮）」

協力：江崎グリコ株式会社、サントリーフーズ株式会社

いずれも、参加対象は一般の方々で参加費用は無料。会場は、全てスーパーアークス北24条店



「無料で健康チェック」会場の様子



乳がん予防セミナー

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 5名の研究者が講義を実施

「芸術と美術館」 文学研究院 准教授 今村信隆

今村准教授は、芸術学や博物館学などを横断的に研究しています。講義の前半では、平安時代の絵巻物や、西洋の絵画、漫画などを例に、物語を伝えるときに重要な顔の表現技法について解説。様々な表情の絵にセリフをつけたり、隣の人と入れ替えてみるワークを実施し、顔の表情によってセリフのニュアンスが変わること、逆にセリフによって表情が違って見えることを紹介

しました。後半は美術館の歴史をひもときながら、禁止事項が多く、堅苦しい印象もある美術館が、コミュニケーションの場としての可能性も秘めていることを、いくつかの事例とともに紹介しました。今村准教授は最後に「芸術も、美術館も楽しいので気軽に触れてみてください」と、生徒たちに語りかけました。



生徒と会話をしながら講義を進める今村准教授

日 時：2024年1月23日（火）15:50－17:20

会 場：北海道札幌北高等学校

参加生徒：1-2年生 12名

「いま学ぶアイヌ民族の歴史：先住民研究で世界をつなぐ」 アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文

先住民考古学が専門の加藤教授は、北海道の先住民族であるアイヌの人々の歴史について話しました。アイヌ民族のように国家を持たない社会は世界中にあり、世界文化遺産の多くが先住民族に関わっていると解説しました。また、礼文島には毎年、土器や遺跡の

調査に世界中から多くの研究者が集まるといい、北海道は歴史の多様性を考える上で重要なフィールドだと話しました。「これまでの常識を問い直し、歴史の埋まっていないピースを埋めるのが大学の勉強です」と研究の魅力を語りました。



考古学について解説する加藤教授

日 時：2024年2月7日（水）10:50－11:35

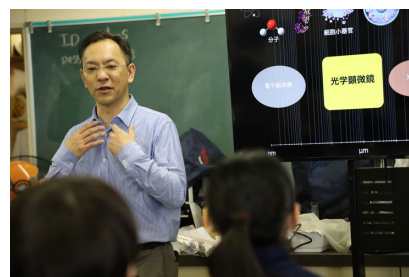
会 場：札幌創成高等学校

参加生徒：2年生 約39名

「細胞の環境応答システムを見てみよう！」 医学研究院 教授 大場雄介

細胞を研究対象としている大場教授は、それらをマイクロメートル単位で観察していると話し、見えるか見えないか分からないものをちゃんと見ようとする拡大鏡が顕微鏡であると説明しました。また、身近な拡大鏡として虫眼鏡を取り上げ、虚像ができることで物が大きく見える凸レンズの仕組みを解説。その後は、紙と小さなレンズで作れる顕微鏡を使い実習を行いました。

た。生徒たちは、自力で顕微鏡を作りそこにプレパラートをはめて細胞を観察するという経験に夢中になっている様子でした。実習後、大場教授は自身の研究に触れ、動的恒常状態にある私たちの細胞が周囲の環境変化に対して見せる素早い反応を可視化していると話し、その研究を支えているという蛍光タンパク質について解説して講義を締めくくりました。



生徒たちへ顕微鏡について解説する大場教授

「健康に暮らすための室内環境とは」 保健科学研究院 教授 池田敦子

環境疫学を専門にしている池田教授は、自身の研究について、特に子どもを対象に長期に渡って調査を行った。室内環境や化学物質に曝されることで健康にどのような影響が出るかを調べていると話しました。そのうえで、1日の約9割を室内で過ごす私たちにとって、自宅や学校の環境が体にとっていかに重要であるかを説明。近年は、乾燥が気にされる傾向にあるものの、過度な湿度はシックハウス症候群

やアトピーに影響すること、また、化学物質の濃度に比例して子どもにアレルギー性結膜炎などの症状が増える事例を解説し、換気の重要性など実生活で私たちが気を付けられることを生徒たちに伝えました。講義終盤では、測定機器を使って二酸化炭素濃度などを測る体験もあり、生徒たちは、いつもとは違った視点で身の回りの環境に目を向けていました。



測定機械を使って生徒たちに室内の測定を体験させる池田教授

「流れの中で進む新しい有機化学」 理学研究院 教授 永木愛一郎

有機化学を専門とする永木教授は、近年、学術的にも産業的にも注目されているフロー合成を紹介しました。フロー合成は、従来のフラスコなどで行う合成法とは異なり、原料をパイプなどに連続して流して反応させて目的の化合物を得る方法です。細い流路内に原料を連続的に供給することで高速に混合でき、短時間で合成できることな

どがメリットです。実際に永木教授たちが開発したフロー合成の反応器「フローマイクロリアクター」では、秒単位で精密な反応制御ができるといいます。講義の最後に永木教授は、「ちょっとした発想の転換で常識を変え、社会に貢献できる」と化学の魅力を生徒たちに語りかけました。



生徒たちへ有機化学について解説する永木教授

日時：2024年2月7日（水）13:30－15:50

会場：札幌日本大学高等学校

参加生徒：1年生 計47名

アカデミックファンタジスタとは？

北海道大学の研究者が知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業、「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度は北海道の高校等を対象に31名の教員が講義を実施しています。

北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、Facebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ

<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/>

・Facebook

@Hokkaido.univ.taiwa

（広報・社会連携本部）



リサーチタイムズ



フェイスブック

「研究者のためのスキルアップセミナー⑰ プレゼン資料がわかりやすくなるデザイン4原則」を開催

2月9日（金）、オンラインと対面で「研究者のためのスキルアップセミナー⑰プレゼン資料がわかりやすくなるデザイン4原則」を開催しました。今回で17回目を迎えた本セミナーでは、サイエンスコミュニケーターとして活躍する株式会社スペースタイムの榎木佑佳氏を講師に迎え、教職員や学生など188名が参加しました（オンライン：172名、対面：16名）。

榎木氏は「視線の流れを伝えたい文脈に合わせて資料を作ると理解されやすい」と話し、画像や文字を組み合わせる視覚的に情報を伝えるための4つのポイントを紹介。内容が正しく伝わり、期待するアクションに繋がるデザインについて解説しました。参加者は、ノーベル賞の研究内容を図解するビジュアルアブストラクトを制作する個人ワークに取り組みました。

アンケートでは「資料作りを始める前に、伝えたいことをしっかり言語化しておくことが大切だ」という話が印象的だった」「見やすい色や文字の大きさなど、基本的なことも分かって良かった」などの意見がありました。

（広報・社会連携本部）

研究者のためのスキルアップセミナー⑰プレゼン資料がわかりやすくなる デザイン4原則

日 時：令和6年2月9日（金）18:15～20:15

開催形式：ハイブリット開催

会 場：学術交流会館1階 第1会議室、オンライン（Zoom）



講師の榎木氏



個人ワークに取り組む参加者たち

■ 部局ニュース

文学研究院が書香の森展示スペースにて4本の企画展示を開催

文学研究院「書香の森」展示スペースで令和5年2月13日（火）～令和6年2月29日（木）に、学生が主体となって立案・制作した4本の企画展示を行いました。

「書香の森」展示スペースでは、令和4年度の「書香の森展示ワーキンググループ」（座長・谷本晃久教授）設置後、展示による研究・教育成果の発信を行ってきました。

令和5年度最初の展示は、昨年度から続く『連環画研究・増刊号 ようこそ〈連環画〉の世界へ』（令和5年2月13日～5月12日）です。本展では、近代中国の小型の劇画本である「連環画」を紹介しました。文学研究院中国文化論研究室の武田雅哉名誉教授のコレクションから厳選した資料を基に、同研究室博士後期課程（当時）の熊征氏を中心となって展示を作りました。連環画を模したパンフレットを製作したほか、『北海道新聞朝刊 サタデーどうしん』（令和5年4月22日付）で紹介されるなど、反響を呼びました。

『ヒグマのとなり ←つかず、はなれず→』（令和5年5月26日～8月6日）は、文学部の久井貴世准教授の授業から生まれた展示です。専門家との対話等から知見を集めつつ、ヒグマと人間との関係を再考する、分かりやすい展示を制作しました。文学部のほか、理学部の学生が展示チームに参加してくれたことも本展の特徴です。冊子やメイキング動画の制作など、学生側からの発意により企画が展開していきまし。また、会期終了後も、「サイエンスフェスタ2023」（令和5年12月16日・17日、於札幌駅前地下歩行空間）や「士別サイエンスフェスティバル」（令和6年1月8日、於士別市民文化セ

ンター）に展示ブースを出展し、発信が続いています。そのほか、「毎日新聞」（北海道版、令和5年7月14日）での紹介や、第28回野生生物と社会学会（於筑波大学）でのポスター発表など、様々な展開に繋がりました。

『生々流転—フィールドワークから見たトン族の暮らし—』（令和5年8月10日～11月30日）は、文学院博物館学研究室博士後期課程の朱麗梅氏を中心となり、中国貴州省の少数民族であるトン族の暮らしを紹介しました。このトン族の村の博物館で勤務していた朱氏が撮影した写真や動画を中心に、限られた展示空間のなかでコンパクトに情報を伝えることに挑戦した展示です。また、本展では、東京藝術大学助手の倪雪氏に展示デザインを担当してもらい、オンラインでミーティングを重ねながら、最終的な展示を制作しました。

『癒しの植物画展』（令和5年12月8日～令和6年2月29日）は、洋画家・小磯良平が絵を手掛けた『薬用植物画譜』（1973年）を中心に、「作品」としても鑑賞できる魅力的な植物図鑑類を展示しました。文学院芸術学研究室修士課程の田中駿一朗氏の尽力のもと、北大附属図書館や農学研究院図書室からの協力も得て、実現しました。会期中のアクシデントにより会期途中で展示は中止となりましたが、展示した図譜を少しずつめくっていく展示手法は好評でした。

令和5年度の展示をきっかけにして、企画した学生による書籍や論文の刊行、北大総合博物館での新たな展示に繋がる事例も出てきています。

（文学院・文学研究院・文学部）



「ヒグマのとなり」展



『生々流転—フィールドワークから見たトン族の暮らし—』展 記念撮影



各種印刷物



カルガリー大の学生が見学

先端生命科学研究院でFD研修及び総会2023を開催

先端生命科学研究院では2月7日（水）に、FD研修及び総会2023をオンライン開催しました。協力講座、連携講座を含めた教育・研究担当の教員40名が参加しました。

FD研修はテーマを「学科の将来を考えよう！」とし、アクティブラーニング形式で行いました。本研究院で教育を担当している理学部生物科学科

（高分子機能学）の課題や今後の方針について、若手・中堅の教員が中心となって活発な議論が行われました。

総会では、学部、大学院、研究院、附属センターの1年間の活動が報告されました。

終了後のアンケートではグループワークを評価する声が多く、「世代別のグループで発言しやすかった」、「当

事者意識を持って参加できた」、「教員間のコミュニケーションが図れた」などの意見がありました。研究院に関わる教員が意見交換することで、今後の運営改善に繋げられる有意義な時間となりました。

（生命科学院・先端生命科学研究院）



参加者の集合写真

令和6年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行政

薬学部では、2月7日（水）に令和6年度薬学実務実習開始セレモニー「臨床現場へあがるための心得」を挙行政しました。

この式は、薬学科学生が実務実習（病院実習・薬局実習）に臨むにあたり毎年実施しているもので、学生は引き締まった面持ちで参加していました。

式には、木原章雄薬学部長、中川真一教務委員長、実務実習担当教員らが

出席し、実務実習の趣旨や学生に期待すること、今年度実施された実務実習を踏まえての注意点等とともに、激励の言葉が伝えられました。

受入施設からは、北海道大学病院薬剤部の武隈 洋副部長、株式会社インファーマシーズの早坂麻依氏、株式会社ツルハの中村文哉氏、株式会社なの花北海道の井野千枝子氏が出席し、臨床の現場・患者さんに直接接する場

で実習に臨む際の心構えなどが伝えられ、学生たちが神妙に聞き入る様子が見られました。

また、木原薬学部長から学生一人ひとりへ実習中着用するネームプレートが手渡され、病院・薬局合わせて5か月に及ぶ実習への壮行となりました。

（薬学研究院・薬学部）



激励の言葉をかける北海道大学病院薬剤部の武隈副部長



ネームプレートを手渡す木原薬学部長



熱心に聞き入る学生たち

農学部が第39回あぐり大学「牛乳が固まる不思議、伸びる謎」を開催

農学部において、2月17日（土）にあぐり大学を開催しました。あぐり大学とは、北海道大学農学部と北海道新聞編集局が農学同窓会後援のもと2014年度から行っている連続親子講座で、「食と農」について、頭と体を使って学ぶ体験的講座です（農学同窓会後援）。農学部の複数の学科から、学生もスタッフとして参加しています。

第39回となる今回は、「牛乳が固まる不思議、伸びる謎」のタイトルで、

農学研究院の^{くむらはると}玖村朗人教授（応用食品科学）にあぐり博士をご担当いただきました。

牛乳に少しの工夫をすることで、ヨーグルトやチーズに変わります。今回は、牛乳の豊かな栄養成分や北海道牛乳の特徴について学んだ後、北海道大学の農場の牛からとれた牛乳を使って固めたり、伸ばしたりと様々な変化を目で見て、手で触れて体験しました。こうした変化がなぜ起こるのか、につ

いても原理からしっかりと説明していただきました。また、北大牛乳を試飲したり、チーズやバターづくりも体験しました。

参加者の子どもたちからは、歓声があがる場面もあり、楽しんでいただけた様子でした。

（農学部）



あぐり博士（玖村教授）の説明を聞く親子



牛乳の変化を体験する子どもたち



牛乳を使って実験



牛乳からできたバター

スラブ・ユーラシア研究センターが 「生存戦略」「ウクライナ」研究全体集会を開催

スラブ・ユーラシア研究センターにおいて2月7日（水）に国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築（通称「生存戦略研究」）の全体集会が、2月8日（木）にウクライナ及び隣接地域研究ユニット（通称「ウクライナ研究」、昨年11月14日付で北海道大学の「各部局の強み・特色」を促進する新規の事業として発足）の全体集会が開催されました。

ロシアによるウクライナ侵攻を受け、スラブ・ユーラシア研究に関わる世界の諸学会では「脱植民地化」が盛んに論じられるようになりました。こうした動向を受けつつ、当センターでは、この問題をよりグローバルな文脈で理解するために、7日の全体集会では、第一部「東アジア・東南アジア」、第二部「南アジア・中東」、第三部「ス

ラブ・ユーラシア」に分け、地域ごとの「脱植民地化」の状況を議論しました。参加者は76名でした。

8日には、ウクライナへの侵攻の開始から2年が経過しようとするなか、ウクライナで継続する危機を考える会議を Russia's War against Ukraine and the Crisis in Eurasia—Challenges for the Humanities と題して開催しました。第一部では、ウクライナ専門家に二つの特別講演を依頼し、第二部では、ウクライナに加えて、現在ユーラシア大陸で生じているさらに二つの危機—ナゴルノ・カラバフ、パレスチナ—に関する専門家を招聘し、討論をしました。参加者は51名でした。討論では、人文系研究者の果たすべき役割として、「真実」（それが立場によって異なることも考慮に入れつつ）の追及や社会

への情報発信が挙げられる他、異なる見解の研究者の対話を続けていくことの重要性が指摘されました。そして、この集会もまた、そうした対話の試みの一つでもあるとの声も登壇者からあがりました。

2日間とも現在の世界で生じている危機をどう理解するべきであり、またそれに対して研究者がどのような貢献をするべきであるのかを巡って、有益な意見交換ができたと思います。参加した他部局の若手研究者からは、質の高い議論がオープンになされていることについて、高く評価する声が聞かれました。さらに多くの方に参加していただけるよう、広報も充実していく予定です。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



2月7日（水）生存戦略研究全体集会の様子



2月8日（木）ウクライナ研究全体集会後の記念写真

環境健康科学研究教育センターが フューチャー・アース日本ハブ集中会議2024を開催

フューチャー・アース（Future Earth, FE）日本ハブの集中会議が、1月29日（月）～31日（水）に、オープンイノベーションハブエンレイソウにおいて開催されました。

本学はFE日本委員会に参加しており、5つの部局からなる北海道大学FEコンソーシアムを中心にその活動を支援・強化しています。本センターでは、FE国際事務局日本ハブ及びアジア委員会（Asia Regional Committee）の活動を支援しています。

今回の集中会議では、春日文子FE国

際事務局日本ハブ事務局長及びFE日本委員会の事務局長である山内太郎環境健康科学研究教育センター長を始め、当センターの教員を含む国際事務局日本ハブのScience officer, Communication officer, Administrative officerら15名が参加し、地球環境課題解決にむけたタスクフォース、連携体制について活発な議論が交わされました。

ディスカッションでは、具体的なアクションプランが模索され、科学、コミュニケーション、行政などの分野での協力が強調され、気候変動に対処するための包括的な取り組みへの重要性

が共有されました。

これにより、FE日本ハブはますますワーキンググループ、メンバー間のネットワークを強化し、協力を深めながら、地球環境に対する包括的で柔軟な取り組みを支援していくことが期待されます。本集中会議を通じて、これらの建設的な議論を一層進展させ、持続可能な未来への貢献を強化していく予定です。

（環境健康科学研究教育センター）



会議の様子



集合写真

北図書館で「外国語教育センター特別企画 外国語授業関連図書展示」を開催

附属図書館（北図書館）では、令和5年12月11日（月）～同6年1月22日（月）まで、「外国語教育センター特別企画 外国語授業関連図書展示」を開催しました。

この企画はメディア・コミュニケー

ション研究院の増田哲子准教授をはじめとする外国語授業担当教員との協力により実施しました。教員がお薦めする様々な言語や文化、歴史に関する図書20冊及び電子ブック1点と教員からの推薦文を、増田准教授より提供され

た装飾品と共に展示しました。

（附属図書館、
メディア・コミュニケーション研究院）



展示の様子

附属図書館で「GitHubを使ってみよう！ オンラインツール活用講習会」を開催

附属図書館では2月7日（水）に本学メディア・コミュニケーション研究院のミヒャエル・シルツ准教授を講師に迎え「GitHubを使ってみよう！オンラインツール活用講習会」を開催しました。北図書館セミナールームでの対面形式のほか、後日アーカイブ配信を視聴するオンデマンド形式も含め100名以上の参加申込みがありました。

GitHubは、ソフトウェア開発で使用

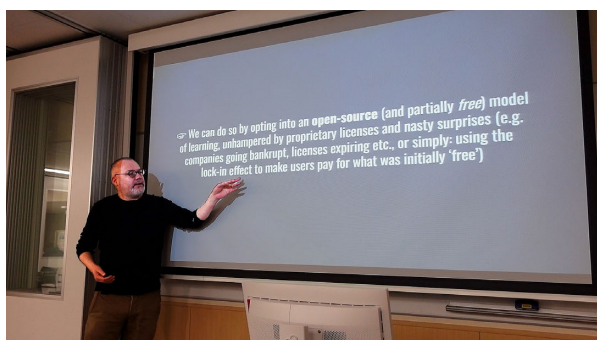
されるツールというイメージがありますが、ファイルのバージョン管理が容易にできる、ファイルを検索しやすい、複数人での編集が行いやすい、など日々の学習・研究にも役立つツールです。

講習会では、GitHubの紹介からスタートし、参加者が持参したPCを使って、アカウントの作成からファイルの作成・保存までを体験しました。講

師のシルツ准教授は日本語と英語を交互に切り替えながら説明し、日本語以外を母語とする留学生にも理解しやすい講義が実施されました。

講義後にはGitHubの使い方の質問や類似したツールとの違いについての質問などが寄せられ、質疑応答や意見交換が活発に行われました。

（附属図書館）



GitHubの有用性について解説されるシルツ准教授

「GitHub、ナニソレ？」「GitHubって理系のツールでしょ」
という方歓迎！学習・研究を効率化するGitHubを学べます

GitHubでタイパ

GitHubを使ってみよう！オンラインツール活用講習会

講師：ミヒャエル・シルツ 先生
メディア・コミュニケーション研究院・准教授
対面 10名 / オンデマンド（後日配信）
※日本語・英語対応
※事前のお申込みが必要です

◎GitHubのメリット◎

- ・授業メモやレポートを蓄積できる
- ・ファイルのバージョン管理ができる
- ・過去の資料が探しやすい
- ・複数人での編集がしやすい

シルツ先生

2024.2.7(水)

15:00-16:00

北図書館 西棟2F セミナールーム

お申込み・詳細は
こちらから↑

開催告知ポスター

■ 理事退任にあたって

本年3月31日限りで理事・副学長を退任される方のお言葉と略歴を紹介します。

理事・副学長

ます だ たか お
増田 隆夫 氏



理事・副学長の増田隆夫です。

3年半にわたって、北海道大学の研究、産学連携の担当理事を務めさせていただきました。

この間、HU VISION 2030がまとめられて、北海道大学のスタンスが明確になりました。特に研究活動としてExcellenceとExtensionの方向性が示されたことで、各研究者が自分の立ち位置を確認できるようになったと思います。

Excellenceとしての研究成果はアウトプットとしてTop10%論文数、科研費採択件数や共同研究費など数値化しやすい指標で評価されますが、SDGsに深く関係する分野横断型のプロジェクトや、自治体や住民も含めた産学官金が連携するコンソーシアム形成事業などのExtensionの評価は数値で表すことが難しいアウトカムで判断されることになると思います。唯一の評価は、最終的な受益者（例えば、住民）が、当該事業が“良かった”か、“悪かった”か、の“1”または“0”で評価する以外は、主観によって評価されると思います。それがMoving Goalにならないためにも、事業を提案する際にはアウトカムのイメージ（Goal）を最初に明確にし、そこからのバックキャストによって実施する研究の項目を設定することになります。このアウトカムのイメージを、研究者が押しつける社会の“あるべき姿”ではなく、事業の成果の受益者が望む“ありたい姿”を基本として考えなくてはならないと思います。

また、バックキャストによって、事業で実施する一連の研究項目が明確になりますが、殆どの場合、一連の研究項目全体としての最適な状態と、各研究項目の最適な状況は一致しないことにも注意を払うことが必要と思います。

ExcellenceとExtensionの両面を推し進める北海道大学が、實金総長が掲げられたNovel Japan University Modelとして我が国及び世界において確固たる地位を確立する事を願っています。

長年にわたる皆様のご協力とご厚情に深く感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年1月11日
昭和54年 3月	京都大学工学部卒業
昭和56年 3月	京都大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和57年10月	京都大学工学部助手
昭和63年 7月	工学博士（京都大学）
平成元年 4月	京都大学工学部講師
平成 6年 2月	京都大学工学部助教授
平成 8年 4月	京都大学大学院工学研究科助教授
平成13年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授
平成24年 4月	北海道大学大学院総合化学院副学院長
平成26年 3月	
平成26年 4月	北海道大学大学院工学研究院副研究院長
平成29年 3月	
平成29年 4月	北海道大学大学院工学研究院長・工学部長
平成31年 3月	
令和 2年 4月	北海道大学大学院工学研究院特任教授
令和 2年10月	北海道大学理事・副学長

理事

すがわらのぶよし
菅原 修孝 氏

3年9ヶ月の間、多くの皆様大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

金融業界、物流業界での38年間の勤務の後、教育・研究の最高峰の大学での務めは私にとって極めて難しいものでした。分からないことを埋めながら、少しでも前に進む力につなげる、そんなことを思いながらの4年弱でした。

喜びもたくさんありました。担当業務柄、多くの企業や団体、同窓生の皆様とお話しさせていただく機会に恵まれました。そこから感じたのは、「北大への期待」・「北大への信頼」・「北大への郷愁」です。サステイナブルな未来社会の形成に向けての期待、長い年月培ってきた教育・研究への信頼、そして郷愁を呼び起こす清き国たるキャンパスの存在。北海道大学を語るにはたくさんの時間が必要で、北大の多面性はまさに比類なきものと感じます。

大学教育・大学生活は、若者にとってのあこがれです。研究の成果は、社会の希望です。本学OBの一人として北海道大学に学ぶ学生たちにエールを送りながら、退任のご挨拶とさせていただきます。皆様のこれまでのご厚情に深く感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和35年6月1日
昭和58年 3月	北海道大学法学部卒業
昭和58年 4月	北海道東北開発公庫
平成11年10月	日本政策投資銀行地域企画部（北海道東北地域担当）課長
平成17年 3月	日本政策投資銀行産業・技術部次長
平成18年 7月	山梨県民信用組合総合企画部長
平成19年 7月	DBJ野村インベストメント株式会社取締役管理部長
平成21年 6月	株式会社日本政策投資銀行新潟支店長
平成24年 7月	苫小牧埠頭株式会社参与、企画部長
平成27年 6月	苫小牧埠頭株式会社取締役総務部長
令和元年 6月	苫小牧埠頭株式会社常務取締役
令和 2年 6月	北海道大学理事

理事

うめはらとしゆき
梅原 俊志 氏

振り返れば3年と8ヶ月、あっという間に過ぎた時間でした。前職時代の仕事の関連で北大との接点を頂き、大学経営の現場に携わるお声掛けを頂いてから、すぐにコロナ感染拡大の波が押寄せ、世界中で活動が停止する危機に直面する事となりました。その間に大学としての機能を失うこと無く八面六臂で尽力されている先生、事務の方々のご対応には本当に頭が下がる思いでした。

コロナ禍が去ると共に大学では一体感が醸成され様々な新しい働き方改革が提案され、現在の業務の標準化、DX化へと歩まれています。まさに、“ピンチこそチャンス”と捉え取組まれた成果だと感じます。

創立150周年を迎えようとしている北大で、『世界に伍する大学』を目指し教育・研究を超えた様々な改革、挑戦の数々を計画的に推進されている寶金総長を中心とした経営チームの皆様方が熱く議論される“大学経営の最前線（理事会議）”の場に、微力ながら参画出来た事は大きな喜びでした。

この3月末で任期を終え大学を去る事になりますが、私にとって沢山の学びの機会を与えて下さった総長、理事の皆様方へ感謝するとともに、北大が今後益々の発展を遂げ、SDGsインパクトランキングの如く多方面で世界トップに評され、発展を遂げられることを心より期待しております。

最後に全ての皆様方に感謝を申し上げ、終結の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年9月3日
昭和59年 4月	日東電工株式会社
平成21年 7月	日東電工株式会社 事業部長
平成22年 6月	日東電工株式会社 執行役員、事業部門長
平成25年 6月	日東電工株式会社 上席執行役員、事業部門長
平成27年 4月	日東電工株式会社 取締役、事業部門長
平成29年 4月	日東電工株式会社 取締役、CTO、全社技術部門長
平成30年 4月	日東電工株式会社 取締役、CTO、CIO、全社技術部門長
令和元年 6月	日東電工株式会社 代表取締役、CTO、全社技術部門長
令和 2年 7月	北海道大学理事

■定年を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年を迎える方々のお言葉と略歴を紹介します。

法学研究科教授

しろした ゆうじ
城下 裕二 氏



教員として16年、かつては学部生・大学院生として11年、合わせて27年という期間を、広大で緑豊かな落ち着いたキャンパスで過ごさせていただいたことは、大変幸せなことでした。「都ぞ弥生」の「羊群声なく牧舎に帰り」という歌詞は私の最も好きな部分ですが、この歌詞から目に浮かぶのは、まさに北大生活の風景そのものです。

本学での教員生活を振り返りますと、教育面では、後半は法科大学院での指導が中心となり、特に法科大学院長を務めた時期は、大きな制度変更に伴う対応に追われましたが、何とか終わることができました。研究面では、総合大学としての特質を生かして、医学・心理学をはじめとする多様な分野の研究者の方々と交流を重ね、刑事法学と隣接諸科学の交錯領域に取り組みしました。いずれの場面におきましても、同僚の先生方をはじめ、事務職員の皆様のご厚情、そして学生諸君の励ましに支えられたことは言うまでもありません。この場をお借りして改めて心より感謝申し上げます。これからも、大学は多くの新たな改革を遂げるべきか否かの岐路に立たされことになると思いますが、北大が、「変えるべき部分」と「変えるべきではない部分」を強く意識した航路を選択されることを祈ってやみません。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年8月6日
昭和58年 3月 北海道大学法学部卒業
平成 2年 3月 北海道大学大学院法学研究科博士後期課程修了（法学博士）
平成 2年 4月 札幌学院大学法学部助教授
平成 9年 4月 札幌学院大学法学部教授
平成14年 4月 明治学院大学法学部教授
平成20年 4月 北海道大学大学院法学研究科教授
令和 2年 4月 } 北海道大学法科大学院長
令和 4年 3月 }

水産科学研究院教授

さえき ひろき
佐伯 宏樹 氏



平成5年から31年間の長きにわたり、北海道大学には恵まれた環境で学問に取り組む機会を与えていただきました。民間企業から大学人に転身した当初は、環境の相違に戸惑うことばかりでしたが、徐々に本学の一員としての自覚が醸成され、ここに無事退職の日を迎えることができました。この間、親しくご指導いただいた学問上の先輩諸氏と事務部門の皆様には、この場を借りて心から御礼申し上げます。そして何よりも、学生諸君との議論と膝を交えての交流が、マンネリズムとは無縁な学究生活の原動力となりました。ご縁のあった皆さんに、心から感謝申し上げます。

北海道は、私の専門である水産食品科学にとって重要な地域ですが、それだけではなく函館キャンパスで培ったこの地への愛着は、私にとって最も大事なアイデンティティの1つです。この素晴らしいフィールドで生活し、また北海道大学のOBとして卒業することを誇らしく思いつつ、退職の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年6月17日
昭和56年 3月 東京水産大学水産学部卒業
昭和56年 4月 大洋漁業株式会社
平成 4年12月 博士（水産学）（北海道大学）
平成 5年 4月 北海道大学水産学部助教授
平成12年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

水産科学研究院教授

わたぬき 綿貫
ゆたか 豊 氏



学生時代を含めると40年近く北大にお世話になりました。思い返してみると、若い頃この自然豊かな北海道の地で過ごした一見無駄な時間、特に教養学部（当時）での外に向けては何も生み出さなかった時期、が非常に大切で重要だった気がします。記憶の中でのインパクトが強いだけかもしれませんが、そう思うと北大で教員として働いている間、若者に対して学位論文をスケジュールに従ってスマートに仕上げる、私の考えるところの研究成果を上げることを勧めるだけで、本当に良い教育ができたのかと反省する点も多くあります。一方で、研究に限れば、わが国ではそれまでほとんど手がつけられていなかった海鳥の繁殖行動・生態の研究、特に海洋環境との関係に関する研究を始め、この分野の発展にそれなりに貢献できたことはありがたいことだったと思います。そのスタートを切らせてくれた北海道の天売島、研究者として働いた東京と南極、教員として再び迎えてくれた札幌、そして海洋学と結びつく新たな展開をさせてくれた函館の地、そしてそこで出会った方々に深く感謝します。今後は、北海道民として海鳥の現状調査や保全（研究ではなく）に取り組んでいきたいと考えています。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年1月2日
昭和56年 3月 北海道大学農学部卒業
昭和58年 3月 北海道大学大学院農学研究科農業生物学専攻修士課程修了
昭和62年 9月 北海道大学大学院農学研究科農業生物学専攻博士後期課程修了
昭和62年 9月 農学博士（北海道大学）
昭和62年10月 日本学術振興会特別研究員
昭和62年12月 国立極地研究所寒冷生物部門助手
平成 5年10月 北海道大学農学部助手
平成 9年 3月 北海道大学農学部助教授
平成11年 4月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成15年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院准教授
平成26年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授
令和 4年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長

理学研究院教授

さいとう 齋藤
むつみ 睦 氏



アメリカでの4年をはさみ仙台に9年、そして鮭のように北海道に帰ってきました。高校を出てから13年ぶりの北海道で、やはり北海道では心が落ち着くなあと思ったものでした。以来いつの間にか30年以上が経ってしまいました。

それぞれの場所で、重要なときに影響を受ける方々と出会うことができ、研究生活を続けていくことができました。振り返ってみると、全てのことが繋がって現在にいらっているなあと感じます。専門は数学で、自分の性に合った代数と組合せ論の両方の性質を併せ持った対象を研究してきました。研究についてもそれ以外のことについてうまくいったときもありましたし、中々うまくいかなかったことも多くありましたが、色々な人に助けられてきました。最近10年弱は他分野の先生方とも知り合いお話しする機会にも恵まれて貴重な体験をさせて戴きました。退職してもしばらくは数学の研究を続けていくつもりです。

何かと効率化が叫ばれ世知辛い世の中になってきているなか、北大キャンパスの牧歌的雰囲気は貴重です。是非保って欲しいと思います。

この機会に諸先輩や同僚の先生方に感謝申し上げるとともにとりわけお世話になった事務の方々に深く感謝申し上げます。

略 歴

昭和58年 3月 東北大学理学部卒業
昭和60年 3月 東北大学大学院理学研究科博士課程前期2年の課程修了
平成元年 5月 ペンシルベニア州立大学大学院博士課程卒業
平成元年 5月 Ph.D.（ペンシルベニア州立大学）
平成元年 7月 東北大学理学部助手
平成 4年11月 北海道大学理学部講師
平成 7年 4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院理学研究院准教授
平成24年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授
平成27年 4月 } 北海道大学大学院理学研究院副研究院長
令和 5年 3月 }
平成31年 4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
令和 5年 3月 }

理学研究院教授

ますだ りゅういち
増田 隆一 氏

本学には、共通一次テスト元年の学生として入学以来、約40年間お世話になってきました。当時は、大学のホームページやパンフレットはなく、道外の高校生であった私は、大学受験ラジオ講座を聴くのを頼りに、北大の風景を思い描いていました。運良く入学できましたが、本州では桜もとうに終わっているというのに、4月の札幌にはほとんど緑もなく、どうしてこんなに寒いところに来てしまったのかと、ホームシックにかかってしまいました。しかし、ゴールデンウィークを過ぎると、北海道には清々しい新緑と開花の初夏が一気にやってきます。その情景を目の当たりにして、私の不安は一気に吹き飛びました。それ以降、海外留学も経験しましたが、ホームシックにかかったことがありません。私は、日本列島の動物相を分けるブラキストン線（津軽海峡）の動物地理学的な効果を研究してきましたが、日々、北国の自然環境の特徴を、身をもって体験しています。自然に恵まれ、自由な学風の中にある北大で研究に取り組んでこられたことは本当に幸せな時間でありました。一方、「少年老いやすく、学成り難し」をひしひしと感じています。学生の皆さんには、北大での学究と生活の時間を大切にいただきたいと思います。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年4月7日
 昭和58年 3月 北海道大学理学部卒業
 昭和60年 3月 筑波大学大学院医科学研究科修士課程修了
 昭和62年 4月 日本学術振興会特別研究員
 平成元年 9月 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了
 平成元年 9月 理学博士（北海道大学）
 平成元年12月 アメリカ合衆国国立がん研究所研究員
 平成 3年 1月 北海道大学理学部附属動物染色体研究施設助手
 平成13年 4月 北海道大学先端科学技術共同研究センター助教授
 平成17年 4月 北海道大学創成科学共同研究機構助教授
 平成19年 4月 北海道大学創成科学共同研究機構准教授
 平成20年11月 北海道大学大学院理学研究院准教授
 平成24年 7月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

さかぐち かずやす
坂口 和靖 氏

学部の際に、恩師である泉屋信夫先生の「生物化学」の講義を受けて、生命科学に魅了されました。また、学生の頃より「化学反応が集積するとなぜ生命になるのか?」と不思議に思い、そして今もずっと思い続けています。これが私の研究の原点です。九州大学で学位を修得した後、米国国立癌研究所で10年に渡り「がん」の基礎研究に従事することができました。この間、癌抑制タンパク質p53の四量体構造の決定や新規の翻訳後修飾の同定と制御メカニズムを見出すことができました。これらは、その後の多量体形成についての網羅的研究や細胞周期及び分化の制御機構、生命原理を目指した研究へと繋がっています。北海道大学に赴任しての21年間、素晴らしいスタッフと学生の皆さんに出会うことができ、研究・教育・運営を進められたのは本当に幸せでした。また、国内海外の多くの研究者との共同研究と教育を実施できたのも北海道大学ならでのことと思っています。

化学部門、理学研究院をはじめ多くの先生方、事務の方々には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

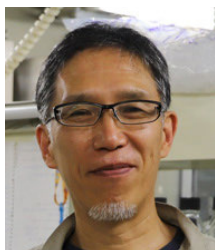
この3月で一区切りとなりますが、残る2年間も研究室のスタッフ・学生の皆さんと楽しみながら研究をさらに推進していきたいと思っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年7月3日
 昭和58年 3月 九州大学理学部卒業
 昭和61年 3月 九州大学大学院理学研究科修士課程修了
 平成元年 3月 九州大学大学院理学研究科博士後期課程修了
 平成元年 3月 理学博士（九州大学理博甲）
 平成元年 5月 } アメリカ合衆国国立衛生研究所国立癌研究所
 平成11年 3月 } Visiting Fellow, Visiting Associate, Staff Scientist
 平成11年 4月 九州大学大学院理学研究科助教授
 平成12年 4月 九州大学大学院理学研究院助教授
 平成15年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授
 平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授
 平成26年 4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
 平成28年 3月 }
 平成26年 4月 } 北海道大学大学院総合化学院長
 平成28年 3月 }

理学研究院教授

むらかみ よう た
村上 洋太 氏



北大着任直前の平成21年2月、私は一緒に北大に異動する学生を連れて住居探しに札幌にやってきた。しかし、私達は運悪く猛吹雪に襲われた。未体験の吹雪の中、部屋をなんとか探し帰ろうとすると、飛行機の欠航によりさらに札幌で一泊するはめになった。我々は全員「こんなところで生活するのか」と暗い顔をして京都に帰ったものである。しかし、その一方で、私が着任予定の生物有化学研究室のメンバーがアパート探しを親身にサポートしてくれ、私達はそのことに深く感動もしていた。実際に北大で活動を始めると確かに冬は厳しいが、灼熱地獄の京都に比べて夏は格段に過ごしやすく十分快適な生活であった。そして、なによりも北大の先生方や事務の方々の親切な対応に感激しながらこの15年間過ごしてきた。特に私が感銘を受けたのは私が所属する化学部門の先生方が全員協力して部門全体として真摯な態度で研究・教育に取り組んでいることであった。我が道を行く、といった感じの先生方が多かった京大の雰囲気とはかなり違っていた。その中で、優秀な学生とともに気持ち良く研究をおこなうだけでなく、今まで経験の少なかった教育でもなんとか頑張ることができたのは、部門の先生方からの有形無形の支えと励ましであったと深く感謝している。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年2月14日
昭和56年 3月	京都大学理学部卒業
昭和58年 3月	京都大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和62年 3月	京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和62年 3月	京都大学理学博士
昭和62年 4月	京都大学ウイルス研究所研修員
昭和62年10月	日本学術振興会特別研究員（がん）
平成 2年10月	メモリアル・スローンケタリングがんセンター研究員
平成 5年10月	京都大学ウイルス研究所助教授
平成19年 4月	京都大学ウイルス研究所准教授
平成22年 4月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

おだ みがく
小田 研 氏



昭和63年7月にNTT光エレクトロニクス研究所から理学部物理学科の助手として着任し、この3月で定年を迎えます。北大には、学生時代の6年間を含め、42年間の長きにわたり大変お世話になりました。広い意味での専門は固体電子物性物理学ですが、NTTの研究所に入所してから今日に至るまで超伝導体の研究一筋に取り組んできました。超伝導の研究を志した一因は、修士1年のとき、超伝導現象の理論的解明等の功績で2度のノーベル物理学賞を受賞しているJohn Bardeen博士と北大でお会いすることができ、指導教員の計らいで研究結果について議論してもらい、大きな刺激を受けたことにあったと思います。在職中は同僚や学生に恵まれ、また国際共同研究や長期・短期の在外研究を通して海外の研究者との交流も深めることができ、忙しくも楽しい研究生活を送れたと感謝しております。最近の10年近くは、理学研究院におけるアクティブラーニングの推進、新渡戸スクール・新渡戸カレッジの教育にも携わることができました。物理学の枠を超えた分野の先生方や事務の方々と協働しての教育は、私にとって大変貴重な経験になりました。最後になりますが、これまでお世話になった多くの方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年9月15日
昭和57年 3月	北海道大学理学部卒業
昭和59年 3月	北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和59年 4月	日本電信電話株式会社光エレクトロニクス研究所研究主任
昭和63年 6月	
昭和63年 7月	北海道大学理学部助手
平成 4年 3月	博士（理学）（北海道大学）
平成 4年 5月	北海道大学理学部講師
平成 5年 4月	北海道大学理学部助教授
平成 7年 4月	北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院理学研究院准教授
平成21年 2月	北海道大学大学院理学研究院教授

農学研究院教授

すずき たかし
鈴木 卓 氏



大学入学時（1979年）から数えると、45年間北大でお世話になりました。私の学年は、共通一次入試の初代です。当時、北大の理系（医・歯・水産を除く）は理Ⅰ系（理科2科目のうち物理必須）、理Ⅱ系（化学必須）及び理Ⅲ系（生物必須）に分かれていて、私は理Ⅲ系を選択しました。二次試験の会場は、現在の農学部N21講義室。黒板の位置が変わっただけで、面影は昔のまま。もうここへ来る機会は無いかもと思いつつ受験した部屋で、40余年の時を経て自分が講義をしているとは…タイムスリップした想いです。北大は至る所に悠久の時間が流れています。教養部から農学部農学科に進学し、果樹蔬菜園芸学講座（現在の園芸学研究室）に配属となりました。4年生の秋（1982年10月2日）に、研究室の同期とニセコへ日帰りでハイキングに行きました。イワオヌプリ、チセヌプリ、長沼、神仙沼…どこを向いても赤・黄・緑に彩られ、落葉の絨毯を歩く心地よさを覚えました。今はなき国鉄時代の岩内線で小沢に出て、急行ニセコに乗り札幌へ帰りました。この記憶を頼りに、一昨年（2022年）の10月2日、再び神仙沼を目指しました。ところが、激変！紅葉には程遠く、景色は青々としたまま。地球温暖化の影響であることは明らかです。このような今日の課題にグローバルな視点で向き合い、未来を創造する青年の、夢を育む北大であり続けて欲しいと思います。私は、研究室伝統のリングやアスパラガスに加え、北海道オリジナルのハスカップ、ハマナス、ギョウジャニンニク、エゾワサビなどを対象に研究生生活を送ることができました。末筆ながら、皆様のご厚情に心から感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年2月1日
昭和58年 3月 北海道大学農学部農学科卒業
昭和60年 3月 北海道大学大学院農学研究科農学専攻修士課程修了
昭和62年 7月 北海道大学農学部助手
平成 4年 3月 博士（農学）（北海道大学）
平成17年 3月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究院助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院農学研究院准教授
令和 2年 7月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

やまだ たかし
山田 孝 氏



昭和56年に入学以来、学生として5年間、教員として14年間、計19年間、北大に大変お世話になりました。北大では、土砂災害、特に火砕流や火山泥流の減災教育研究に深く携わることができました。四季折々の絵葉書のようなキャンパスや北海道のダイナミックな野外の現場で、楽しく充実したこのうえもなく贅沢な時間を過ごすことができました。

平成31年4月に多くの皆様のご支援、ご指導により、北大の新たな全学組織として広域複合災害研究センターが設立され、以来、その運営に携わってきました。その活動により、学生のみならず道内の関係行政機関、民間に対しても、多くの学術知見に基づく助言と人材育成に貢献できました。令和6年4月からは、新センター長のもとに、北海道最大の脅威の一つと称される「日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震」による広域複合災害の減災に資するべく、研究・技術開発成果の社会実装、道内関係機関とのより強固な連携が進められる予定です。引き続き、皆様のご支援とご指導をよろしくお願い致します。

これまでご指導・ご鞭撻を賜った多くの皆様に深く感謝申し上げますとともに、北海道大学のさらなる発展を祈念しております。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年3月19日
昭和59年 3月 北海道大学農学部林学科卒業
昭和60年 4月 建設省入省・岐阜県出向 技術吏員
昭和62年 4月 建設省九州地方建設局大隅工事事務所砂防調査課
昭和63年 8月 建設省土木研究所砂防部砂防研究室研究員
平成 6年 9月 博士（農学）（北海道大学）
平成13年 4月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究院助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院農学研究院准教授
平成20年 4月 三重大学大学院生物資源学研究科准教授
平成22年10月 三重大学大学院生物資源学研究科教授
平成29年 4月 北海道大学大学院農学研究院教授
平成31年 4月 } 北海道大学広域複合災害研究センター長
令和 6年 3月 }

農学研究院教授

なかむら ふとし
中村 太士 氏



北海道に憧れ、北大に入学してから47年あまり、そして北大の助手として採用されてから40年あまりの歳月が過ぎました。このたび、やっと北大を卒業できることになり、正直ほっとしております。博士課程1年目が終わった1984年に、縁あって北大助手として拾ってもらいました。その後、米国オレゴン州にある北太平洋森林科学研究所に留学し、森林と河川の相互作用系に関する研究を行いました。

日本に戻ってきて、教授に昇進するのと同時に、森林資源や野生動物を含む生態系管理、資源利用と保全計画の両立、劣化した生態系の復元を目指した研究を実施してまいりました。1990年代は社会的要請も生産効率の追求から環境保全や再生へと大きく変化し、釧路湿原や知床世界自然遺産区域において、人為によって劣化した自然環境を復元する仕事を行政とともに実施することができました。

私の研究分野はフィールド科学であり、一人では何もできません。私の業績のほとんどは、研究室の学生、卒業生たちと協働で行ってきた研究成果です。これまで私の研究・教育・社会貢献活動を支えてくれた大学の恩師、同僚、学生たち、大学事務の皆さん、行政・企業の皆さん、そして家族に、心から感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年11月11日
昭和56年 3月	北海道大学農学部林学科卒業
昭和58年 3月	北海道大学大学院農学研究科林学専攻修士課程修了
昭和59年 4月	北海道大学農学部助手
昭和62年 3月	博士（農学）（北海道大学）
平成元年 8月	北海道大学農学部講師
平成 4年 8月	北海道大学農学部助教授
平成11年 4月	北海道大学大学院農学研究科助教授
平成12年 8月	北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4月	北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

ますた ちから
増田 税 氏



北大を卒業後にすぐに専売公社（現JT）に入社しました。JTで15年ほど、研究所に勤めた後、北大の出身講座（植物ウイルス病学・菌学講座）に戻りました。そして、28年間在籍し、この3月をもって定年退職します。JTでの最初の研究テーマが「ウイルスに感染したタバコが黄色になるメカニズムの解明」でした。この研究テーマの完成に35年間で費やしました。長い間、何をやってもうまくいかない時期もありました。「RNAサイレンシング」と呼ばれる現象が発見されて初めて私の研究は進み出したのです。JTから北大に移った後のことでした。このテーマに隠されていた謎の全容解明に至ったのは、ほんの2年前のことです。長い間、基礎研究に没頭できて、本当に幸せな研究人生だったと思います。札幌農学校は実学を重んじました。私も、常に基礎研究の成果を応用・実用化につなげる努力は怠りませんでした。私の研究は、将来、化学農業に取って代わると言われている「RNA農業」の開発に先鞭をつけるものになることを期待しています。そして北海道のクリーン農業に役立つことを期待しています。DXが押し寄せ、AIが幅をきかすこれからの大学では、教育・研究環境が大きく変化することでしょう。皆様の今後のご活躍を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年9月28日
昭和56年 3月	北海道大学農学部農業生物学科卒業
昭和56年 4月	日本専売公社社員
昭和61年10月	日本たばこ産業株式会社中央研究所研究技術員
昭和61年12月	米国パデュー大学大学院植物学及び植物病理学専攻修士課程修了
昭和63年 4月	日本たばこ産業株式会社生命科学研究所研究員
平成 8年12月	
平成元年 9月	博士（農学）（北海道大学）
平成 8年 1月	北海道大学農学部助教授
平成11年 4月	北海道大学大学院農学研究科助教授
平成12年11月	北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4月	北海道大学大学院農学研究院教授

先端生命科学研究院教授

で むら まこと
出村 誠 氏

北海道大学理学研究科に着任してから25年以上が経ち、この度退職を迎えることになりました。振り返れば、着任8年目には先端生命科学研究院・生命科学院の設置に伴い所属とともに大学院教育担当が新しくなりました。その後副研究院長・研究院長として同研究院・学院の再編、GI-CoRE GSS拠点の運営、ソフトマター専攻の設置など部局マネジメントを担当してまいりました。教育研究部局としては最小規模ですが、教員採用人事では積極的にテニュアトラック制度を活用・公開し、また若手教員のための次世代生命科学研究を推進する部局型研究支援プログラムも設計するなど人材育成にも注力しました。一方、本学運営組織・人材育成本部を兼務しつつ、2018年頃部局長等連絡会議で本学のSDGsワーキンググループ活動の必要性をお認めいただき、当時のURAステーションとの協働を経て現在のサステナビリティ推進機構SDGs事業推進本部の設置に繋がったことがたいへん印象深い貢献となりました。最後になりますが、これまで支えて下さった諸先生・同僚・事務の方々そして本当に素晴らしい学生諸君に心よりお礼申し上げますとともに、北大が益々発展することをお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年1月1日
昭和56年 3月	東京農工大学工学部卒業
昭和58年 3月	東京農工大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和61年 3月	北海道大学大学院薬学研究科博士課程修了
昭和61年 3月	薬学博士（北海道大学）
昭和61年 4月	東京農工大学工学部教務職員
平成 4年 1月	東京農工大学機器分析センター講師
平成10年10月	北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年 4月	北海道大学大学院先端生命科学研究院教授
平成22年 4月	北海道大学大学院先端生命科学研究院副研究院長
平成25年 3月	
平成25年 4月	北海道大学大学院先端生命科学研究院長
平成31年 3月	
平成31年 4月	北海道大学大学院先端生命科学研究院副研究院長
令和 5年 3月	
令和 2年 4月	人材育成本部副本部長
令和 4年 3月	
令和 3年 4月	北海道大学総長補佐
令和 6年 3月	

工学研究院教授

さ さ き か つ ひ こ
佐々木 克彦 氏

平成元年に助手として着任以来、三十六年間に渡り北大一筋で勤め上げてきた安堵感に包まれております。学生時代の九年間も北大で過ごしており、これを含めると在外期間を除き四十四年間の北大での生活で、世間知らずで教員生活をフィニッシュすることになり、後悔している面も多少ございます。多くの方々に叱咤激励されつつ自分なりの教育・研究を進めることができ、関連の皆様に感謝しております。この間、北大を取り巻く環境は厳しさを増し、組織改革を繰り返している状態が未だ継続中ですが、北大がより良い方向に向かうことを願っております。

この間、国内では阪神・淡路大震災（平成7年）、東日本大震災（平成23年）、熊本地震（平成28年）、北海道胆振東部地震（平成30年）、今年元旦に発生した能登半島地震などの大地震や度重なる台風などにより、多くの人命が失われる災害が数多く発生しております。このような災害により国力を失わないような、地に足をつけた分野を問わない防災研究を今以上に進めることが、これからの大学に課された使命の一つであると思う次第です。

来年度から特任教員として今しばらく在籍させていただきますが、これからの皆様に更なるご活躍を祈願しております。

略 歴

生 年 月 日	昭和35年5月26日
昭和59年 3月	北海道大学工学部卒業
昭和61年 3月	北海道大学大学院工学研究科機械工学第二専攻修士課程修了
平成元年 3月	北海道大学大学院工学研究科機械工学第二専攻博士後期課程修了
平成元年 3月	工学博士（北海道大学）
平成元年 4月	北海道大学工学部助手
平成 4年 4月	北海道大学工学部講師
平成 7年 4月	北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院工学研究科准教授
平成21年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

あけら ひろし
明楽 浩史 氏



33年前の12月北大に着任しました。着任の当日は歩道がデコボコに凍結していて歩くのに苦勞して北18条から工学部に辿り着いたことを思い出します。今でも凍結路面には手こずっていますが、しばし雪景色に見とれてしまうことがよくあります。銀杏や楓の紅葉と雪の共演は素晴らしかったです。また、最近ではキャンパス内でエゾリスによく出会うようになり、キツツキの甲高い槌音が聞こえることもありました。このように恵まれた環境の中で学生生活を送ることができたことに感謝しております。

工学部に着任すると二人の卒論生が待っていました。12月と1月の2か月で卒論指導することになりましたが、大変だったのは学生のほうでした。そのうちの一人は黒板の前で議論しているうちにしゃがみ込んでしまいました。なんとか頑張ってもらって卒業できたので良かったです。北大着任前は研究所に所属していたので、北大に来て初めて研究指導に携わりました。はじめのうちはやりたいのは研究で教育は義務と思っていましたが、そのうち教育が研究に刺激を与えていることに気がつきました。指導する学生が目の前にいることが日々の研究の推進力となり、学生の興味も鑑みて研究の方針を考えるようになりました。

私の研究は電子物性理論に関する基礎研究です。法人化の際には応用研究が強化されて基礎研究が自由にできなくなるのではと心配しておりましたが、今まで自由に研究ができました。多くの皆様のご支援のおかげだと感謝しております。今後も北大の自由な気風の中で教育と研究、基礎研究と応用研究がバランスよく発展していくことを願っております。

略 歴

昭和56年 3月 東京大学理学部卒業
昭和58年 3月 東京大学大学院理学系研究科物理学専門課程修士課程修了
昭和61年 3月 東京大学大学院理学系研究科物理学専門課程第一種博士課程修了
昭和61年 3月 理学博士（東京大学）
昭和61年 4月 東京大学物性研究所助手
平成 3年12月 北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
平成14年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

医学研究院教授

まなべ あつし
真部 淳 氏



私は1985年に北大を卒業し、34年後の2019年に北大に戻りました。その間、聖路加国際病院小児科をベースにイタリアとアメリカで白血病細胞の生物学を学び、東京大学医科学研究所で細胞療法や遺伝子治療の臨床応用を試み、再び聖路加で小児の白血病と骨髄異形成症候群の臨床研究を行い、最後に北大に戻り、固形腫瘍を含む小児がん全体の臨床研究体制を整えてきました。この間紆余曲折もあり、全て予定通りではないですが、結果オーライでしょう。久々に住む札幌は音楽など芸術的に成熟し、また北大病院は学生時代の記憶とは異なり、臨床研究中核・がんゲノム中核拠点・陽子線治療センター・小児がん拠点などのインフラが充実していて驚きました。また各部門が垣根なく協力して診療にあたるのも想像以上でした。私は長らく聖路加で患者中心の医療（多職種が連携し、保険でカバーできないCLSなどの職種も雇用する）を実践しましたが、高い理想を掲げる北大病院の先進医療への取り組みも素晴らしいです。もちろんもう一息の事項もあります。私は今回、定年退職しますが、さらに2年間の再雇用期間に残りの課題を解決させ、人材豊富な北大小児科医局を国内有数のものにしたいと存じます。皆様のさらなるご支援をお願いいたします。

略 歴

昭和60年 3月 北海道大学医学部卒業
昭和60年 4月 聖路加国際病院研修医
平成元年10月 イタリア・ローマ・カトリック大学留学
平成 2年 9月 St. Jude小児研究病院（米国メンフィス市）留学
平成 5年11月 医学博士（東邦大学）
平成 9年 4月 東京大学医科学研究所小児科助手
平成16年 4月 聖路加国際病院小児科医長
平成31年 4月 北海道大学大学院医学研究院教授

医学研究院教授

く す み い ち ろ う
久住 一郎 氏



1978年の北海道大学医学部入学以来、一部の在外所属期間を除き、今日まで46年間の長きにわたり、この緑あふれる、広大なキャンパスでお世話になりました。四季折々にうつろう風景そのものが私にとっては、生活の一部になっていたと言えます。一方で、大学を取り巻く環境は、この間に大きく激動しました。国立大学法人化、大学院大学、働き方改革など次々に押し寄せてくる社会の変化の大きな波に翻弄されてきた感があります。

2012年に医学研究院精神医学教室教授に就任しましたが、世界に通じる第一線の研究を志向する一方で、北海道の地域医療をいかに維持するかに腐心してきました。また、長らく懸案であった医療観察法指定入院医療機関を北海道大学病院附属司法精神医療センターとして2022年に北海道で初めて開設することができました。大学病院での設置は全国初であり、今後、日本の司法精神医学を牽引する役割を担うことが期待されます。この間、なんとか無事職務を全うできたのは、良き先輩・同僚・後輩に恵まれ、暖かく支えられてきたお陰であると心から感謝する気持ちで一杯です。

これからは、北海道大学の外に身を置くことになりませんが、北海道大学の今後ますますの発展を楽しみに見守っていきたいと思います。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年2月18日
昭和59年 3月 北海道大学医学部卒業
昭和59年 5月 北海道大学医学部附属病院医員（研修医）
昭和60年 7月 市立室蘭総合病院精神科医員
昭和62年 7月 国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第三部
平成元年 8月 北海道大学医学部附属病院医員（精神科神経科）
平成 5年 1月 北海道大学医学部助手（精神医学分野）
平成 5年 3月 医学博士（北海道大学）
平成 5年10月 カナダ・トロント大学医学部
平成11年 4月 北海道大学病院講師（精神科神経科）
平成20年 4月 北海道大学医学研究科准教授（精神医学分野）
平成24年 9月 北海道大学大学院医学研究科教授（精神医学分野）
平成29年 4月 北海道大学大学院医学研究院教授（精神医学教室）
平成29年 4月 } 北海道大学大学院医学研究院院長補佐（医学部教務委員長）
令和元年 3月 }

医学研究院教授

しのはら のぶ お
篠原 信雄 氏



猛威を振るったコロナ禍による医療の混乱も2023年内で概ね落ち着きを取り戻し、社会・経済活動もコロナ前の状況に戻っております。我々も2023年10月5-7日にロイトン札幌で、全国から約1600名の参加者を集め、対面で日本泌尿器科学会東部総会を成功裏に終えることができました。参加者数、演題数などはコロナ前より多いぐらいでした。私も2023年11月24日に65歳の誕生日を迎え、いよいよ2024年3月末日で北海道大学大学院医学研究院腎泌尿器外科学教室教授を退職することになりました。2014年10月2日付で、教授に任じられてから、9年半の在任期間となります。その間に、北海道大学医学部の教務委員長を2年、副研究院長（北海道大学教育・研究評議会委員も併任）を2年勤め、大学の運営に携わってきました。また、後半は主に北海道大学病院での業務を行い、血液浄化部部長や北海道大学病院腫瘍センター長に加え、新規に組織された北海道大学病院高難度新規医療技術部門の部門長を長く続けさせていただきました。本当に多くの方のご助力のもと、無事多くの職責を果たせたものと心から感謝しております。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年11月24日
昭和59年 3月 北海道大学医学部医学科 卒業
昭和59年 6月 北海道大学医学部附属病院 泌尿器科入局
昭和60年 4月 苫小牧市立病院 泌尿器科
昭和62年 4月 市立稚内病院 泌尿器科 副医長
平成元年 7月 米国ミシガン大学（1年間）
Barton Grossman教授の下で抗がん剤耐性機構を研究
平成 3年 4月 北海道大学医学部附属病院 泌尿器科 医員
平成 4年10月 北海道大学医学部附属病院 泌尿器科 助手
平成11年 9月 北海道大学医学部附属病院 泌尿器科 講師
平成17年 7月 北海道大学大学院医学研究科腎泌尿器外科学 助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院医学研究科腎泌尿器外科学 准教授
平成26年10月 北海道大学大学院医学研究科腎泌尿器外科学分野 教授
平成29年 4月 北海道大学大学院医学研究院腎泌尿器外科学教室 教授

歯学研究院教授

きたがわ よしまさ
北川 善政 氏



縁あって北海道大学に赴任して無我夢中の20年でした。改めて自分自身の経歴を振り返ってみますと、全国の歯学部教員の中ではちょっとユニークかもしれません。歯学部口腔外科から、浜松医科大学（3年）、福井医科大学（11年）と立て続けに新設医科大学歯科口腔外科で勤務し、2004年北海道大学歯学部に着任し、口腔内科及び口腔外科の臨床、研究、教育に携わらせていただきました。4つの大学を経験できたことは私の大きな財産です。

私の師匠からいただいて大事にしている言葉に、「三惚れ」があります。すなわち「三惚れ」とは、「土地に惚れ、人に惚れ、仕事に惚れ」ということです。私は滋賀県出身ですが、東京、浜松、福井の歯学部あるいは医学部で仕事をする機会にめぐまれ、この北海道大学で長きにわたり仕事をさせていただきました。異動の際にはいろいろな不安と同時に期待もありましたが、常に「三惚れ」を心に留めて地元を好きになり、人との出会いを大切に、歯科という学問、仕事を楽しんできました。

この20年間本当に楽しかったです。沢山の人たちにお世話になり支えられてきたことに深く感謝申し上げるとともに、北海道大学の益々の発展を祈念しております。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年5月27日
昭和58年 3月	東京医科歯科大学歯学部卒業
昭和63年 3月	東京医科歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
昭和63年 3月	歯学博士（東京医科歯科大学）
平成 2年 5月	浜松医科大学医学部附属病院助手
平成 5年 4月	福井医科大学医学部附属病院講師
平成13年 5月	米国ミシガン大学（10か月） Helman教授の下で口腔外科研修
平成15年10月	福井大学医学部附属病院講師
平成16年 7月	北海道大学大学院歯学研究科教授
平成28年 4月	北海道大学病院副病院長
令和 4年 3月	
平成29年 4月	北海道大学大学院歯学研究院教授

歯学研究院教授

やまぐち たいひこ
山口 泰彦 氏



学生時代を含め47年間在籍しました。教養1年の時に大講堂で和田謹吾先生の夏目漱石論を聴講したのが47年も前だとは信じられません。教員になって初めてその大講堂で全学教育科目「かむことと健康」の講義を行ったときは感慨深かったのを覚えています。

歯学部の臨床系の教員のタスクとしては、講義以外に、教育では模型実習や病院での臨床実習、自らの診療、そしてもちろん研究と、とても多くのことが求められます。教授になってからは、さらに管理運営の内容も濃くなり、まったくもってハードな毎日でした。そんな日々を何とか健康で乗り越えて、しかも長年研究、開発に取り組んできたブラキシズム（歯ぎしり）の検査法が保険収載、社会実装され、市民の健康の役に立つところまでこぎつけたのは非常に幸運だったと思います。これまで、教育、研究、臨床、全てにおいてお世話になった多くの皆さんに心から感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年
昭和58年 3月	北海道大学歯学部卒業
昭和62年 3月	北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了
昭和62年 3月	歯学博士（北海道大学）
昭和62年 4月	北海道大学歯学部助手
平成元年10月	北海道大学歯学部附属病院講師
平成13年 7月	北海道大学歯学部附属病院助教授
平成15年10月	北海道大学医学部・歯学部附属病院助教授
平成16年 4月	北海道大学病院助教授
平成19年 4月	北海道大学病院准教授
平成26年 6月	北海道大学大学院歯学研究科教授
平成29年 4月	北海道大学大学院歯学研究院教授

歯学研究院教授

やまもと つねゆき
山本 恒之 氏



私は37年前、自然豊かな環境に憧れて北海道大学にまいりました。他大学出身ですのでいつかは北海道大学を出ていかなければならないのだろうな、と思っていたのですが、縁があったのでしょうか、お陰様でこうして定年まで在職させていただきました。

北海道はどうだ、北海道大学はどうだ、と多くの方に尋ねられます。その度に、北海道も北海道大学も本当にいい所、いい大学だよ、と答えています。本州の夏はとにかく暑いです。北海道の夏は涼しく、最近は温暖化の影響で暑い日も多くなってきましたが、それでも本州に比べれば涼しいものです。冬はさすがに寒いですが、外に出なければいいだけの話。家を暖かくして冷たいビールを飲めばもう最高です。

北海道大学の気風もおおらかで、好きな研究を思いっきりさせていただきました。専門である歯のセメント質の研究では、それなりに業績を上げることができ、それによりドイツ留学もできました。上司や同僚、そして後輩に恵まれ、互いに切磋琢磨しながらの楽しく充実した大学生活でした。本当に感謝しかありません。私は大学を去りますが、北海道大学及び歯学研究院・歯学部の方々の発展を心から祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年3月9日
昭和58年 3月	新潟大学歯学部卒業
昭和62年 3月	新潟大学大学院歯学研究科博士課程修了
昭和62年 3月	歯学博士（新潟大学）
昭和62年 4月	北海道大学歯学部助手
平成 6年 4月	北海道大学歯学部助教授
平成12年 4月	北海道大学大学院歯学研究科助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成29年 4月	北海道大学大学院歯学研究院准教授
令和 3年 4月	北海道大学大学院歯学研究院教授

歯学研究院教授

よこやま あつろう
横山 敦郎 氏



昭和53年4月に北海道大学に入学して以来46年間、これまでの人生の2/3以上を学生、大学院生、教員として北海道大学で過ごしてきました。歯学部を卒業後、学生時代に最も難しいと考えていた有床義歯（取り外しのできる義歯）補綴学を学びたいとの思いから、当時の歯科補綴学第一講座に大学院生として入局しました。院生時代から骨形成について研究し、その後、セラミックス、チタン、カーボンナノマテリアルなどの生体材料への応用に関する研究、補綴歯科治療の予後と効果などの臨床研究を行ってきました。カーボンナノマテリアルについては骨組織との適合性を明らかにし、部分床義歯治療については、長期予後から連結強度の違い（義歯設計における考え方）が義歯治療の予後に影響することを示すことができたのではないかと思います。

人件費ポイント削減問題等の厳しい状況下において、部長として、歯学研究科の歯学研究院、歯学院への改組、さらには研究棟の機能改修に取り組んだことも、今では懐かしい思い出です。

長きにわたりお世話になりました北海道大学の皆様に御礼申し上げますとともに、北海道大学の今後の益々の発展をお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年6月28日
昭和59年 3月	北海道大学歯学部卒業
昭和63年 3月	北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了
昭和63年 3月	歯学博士（北海道大学）
昭和63年 8月	北海道大学歯学部助手
平成12年 4月	北海道大学大学院歯学研究科助手
平成14年 6月	北海道大学歯学部附属病院講師
平成15年10月	北海道大学医学部・歯学部附属病院講師
平成16年 4月	北海道大学病院講師
平成17年 6月	北海道大学大学院歯学研究科教授
平成24年 4月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成26年 3月	
平成26年 4月	北海道大学大学院歯学研究科長・歯学部長
平成29年 3月	
平成29年 4月	北海道大学大学院歯学研究院教授
平成29年 4月	北海道大学大学院歯学研究院院長・大学院歯学院長・歯学部長
平成30年 3月	

獣医学研究院教授

こん やすひろ
昆 泰寛 氏



1977年4月に入学して以来、「北海道大学をやっと卒業できる」気分しております。当時、我が国唯一の獣医学部へ進学後、助手、助教授を経て教授となるまで、留学時を含めそのほとんどを獣医解剖学の教育研究に従事してまいりました。助手のころは血圧調節で重要なレニン-アンギオテンシン系の研究、助教授時代は自己免疫疾患モデルであるMRLマウスを用いた不妊の研究、教授時代は粘膜関連リンパ組織の研究へと、自分の興味の赴くまま自由な発想で研究を続けさせていただきました。

教育面では、39年間にわたって獣医解剖学、組織学、発生学、実験動物学など、基礎獣医学の根幹を学生に教授させていただき、それが少しでも我が国の獣医師養成に貢献できた（のではないかな？）ということを誇りに思う次第です。

獣医学研究院は、今後におきましても教育面及び研究面の双方で北海道大学並びに我が国の獣医学を牽引する改革を推し進めていくことを祈念いたしますと共に、共同課程としてタッグを組んだ帯広畜産大学と獣医学教育の新世界を切り開いていくことを願っております。永きにわたりありがとうございます。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年7月4日
昭和56年 3月 北海道大学獣医学部卒業
昭和58年 3月 北海道大学大学院獣医学研究科修士課程修了
昭和63年 3月 獣医学博士（北海道大学）
昭和59年11月 北海道大学獣医学部助手
平成 6年10月 北海道大学獣医学部助教授
平成15年 4月 北海道大学大学院獣医学研究科教授
平成29年 4月 北海道大学大学院獣医学研究院教授
平成25年 4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
令和 3年 3月 }
平成29年 4月 } 北海道大学大学院獣医学院長
令和 3年 3月 }

文学研究院教授

あだち まゆみ
安達 真由美 氏



札幌を舞台にした『薔薇のために』、時計台でお馴染みのS市にあるH大獣医学部を舞台にした『動物のお医者さん』。これらはワシントン大学在学中に、日本人の友人たちと回し読みしていた愛読書です。当然その時は、よもや10年後に自分がその土地でマンションを購入し、H大の教員になるとは思っていませんでした。

13年の北米生活を終え、最初に着任した山梨大学では音楽教育講座に所属し、小学校教員を目指す国算理社美体を専門とする「鍵盤なんて小学校のピアノ以来触ったことのない」学生たちに、初見で楽譜を弾くための秘策や、どんな歌にも応用の効く伴奏付け、キーを変える技、さらには簡単な即興演奏や作曲の方法を伝授したりしていました。これはこれで楽しく充実していましたが、専門である音楽心理学の授業は一般教養でしか教えられず、少しばかりもやもやした気持ちになっていた頃、私の人生を新たな方向へと導いてくれたのがあのH大、北大心理システム科学（現心理学）講座でした。

以来22年、音楽心理学に興味を持つきっかけとなった初見視奏の実験をはじめ、博士候補となるための勉強中に出会った胎児の音環境に関する知見を元にした胎児実験など、大学院時代に夢見ていた研究も実施することができました。今後はせつせと成果のアウトプットに取り組むつもりです。

これまで支えてくださった諸先生、同僚・事務の皆様、学生たちに心より御礼申し上げます。定年で一区切りつきますが、特任教員として、もうしばらくお世話になります。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年1月31日
昭和58年 3月 新潟大学教育学部特別教科教員養成課程卒業
昭和58年 4月 カワイ音楽教室講師（至昭和60年3月）
昭和62年10月 アメリカ合衆国コロンビア大学ティーチャーズカレッジ音楽学部教養修士課程（ピアノ教育学専攻）修了
平成元年 1月 アメリカ合衆国コロンビア大学ティーチャーズカレッジ音楽学部教育修士課程（音楽教育学専攻）修了
平成 7年12月 アメリカ合衆国ワシントン大学大学院音楽学部博士課程（心理音楽学専攻）修了・Doctor of Philosophy
平成 8年 1月 } カナダトロント大学博士研究員（常勤）
平成 9年12月 }
平成10年 1月 } アメリカ合衆国ワシントン大学音楽学部客員研究員
平成10年 3月 }
平成10年 4月 山梨大学教育人間科学部助教授
平成12年 2月 } 英国シェフィールド大学音楽学部客員講師
平成12年 5月 }
平成14年 4月 北海道大学大学院文学研究科助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院文学研究科准教授
平成24年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4月 北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

なかむら みはる
中村 三春 氏

キャンパスに入ると朝の静謐な空気。夏はメインストリートの青葉が目優しく、冬は踏みしめられた雪道に栗鼠が躍り出る。北海道大学での15年半は、私にとってかけがえのない時間でした。ここで多くの学生たちと同僚、多くの研究者仲間と交流し、ともに仕事をしました。毎週の講義や授業、それに校務、毎年の研究会や時折の大きな学会。それらに参加したり主宰したりしながら、話を聞き、話をし、そして論著をまとめる日々でした。いつも忙しく、市内も道内も名所にはほとんど行ったことが無いほどです。

赴任時に、ちょうど国際化の拡大が本格的に始まった頃で、それ以来、大学の行事でライデン（オランダ）、ヘルシンキ（フィンランド）、北京・天津（中国）に派遣され、英語教育の研修や、専門に関する講演を行いました。学会活動でも、パリやストラスブール（フランス）、それから中国と台湾の多くの大学に招かれ、逆に2019年7月には村上春樹に関する国際シンポジウムを誘致し、海外からの多くの参加者が青葉のキャンパスを満喫されました。私を世界に引きずり出してくれたのも本学の恩恵です。

教育・研究、さらに自己研鑽という意味でも、私は北海道大学に勤めなければ得られない体験をしました。お世話になったすべての方々に、深く御礼を申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年12月3日
昭和56年 3月	東北大学文学部卒業
昭和58年 3月	東北大学大学院文学研究科博士課程前期2年の課程修了
昭和58年 7月	東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程中退
昭和58年 8月	東北大学文学部助手
昭和61年 4月	弘前学院大学講師
昭和62年 4月	山形大学人文学部講師
平成 3年 4月	山形大学人文学部助教授
平成18年 3月	山形大学人文学部教授
平成20年10月	北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4月	北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

ごとう やすふみ
後藤 康文 氏

ミラボー橋の下をセーヌが流れ われらの恋が流れる
わたしは思い出す 悩みのあとには楽しみが来ると
日も暮れよ 鐘も鳴れ 月日は流れ わたしは残る
手と手をつなぎ 顔と顔を向け合おう
こうしていると われらの腕の 橋の下を
疲れた無窮の時間が流れる

日も暮れよ 鐘も鳴れ 月日は流れ わたしは残る
流れる水のように恋も死んでゆく 恋もまた死んでゆく
命ばかりが長く 希望ばかりが大きい

日も暮れよ 鐘も鳴れ 月日は流れ わたしは残る
日が去り 月が行き

過ぎた時も 昔の恋も ふたたびは帰らない

ミラボー橋の下をセーヌが流れる

日も暮れよ 鐘も鳴れ 月日は流れ わたしは残る

これは、アポリネール作・堀口大學訳の「ミラボー橋」という詩です。こういうものが妖しい誘い水となり文学に傾倒した少年は、その後平安文学のことばの美しさに魅了されて研究の世界に入り、いつの間にか65歳の老人となっていました。その間、道に迷うことは一度もありませんでした。何とも恵まれた、贅沢な人生だったと思います。

北大では30年の長きにわたってお世話になりました。レベルの高い学生諸君と一流の学者諸氏に囲まれ、お蔭様で充実した時間を過ごすことができました。どうもありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年4月30日
昭和57年 3月	九州大学文学部文学科卒業
昭和61年 3月	九州大学大学院文学研究科国語学・国文学専攻修士課程修了
平成元年 3月	九州大学大学院文学研究科国語学・国文学専攻博士後期課程単位修得退学
平成元年 4月	九州大学文学部助手
平成元年11月	宮崎大学教育学部助手
平成 2年11月	宮崎大学教育学部講師
平成 4年12月	宮崎大学教育学部助教授
平成 6年 4月	北海道大学文学部助教授
平成12年 4月	北海道大学大学院文学研究科助教授
平成13年 4月	北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4月	北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

いけだ とおる
池田 透 氏



北大には、大学入学以来47年間の長きにわたってお世話になりました。自然の豊かな北海道は、私の研究にはまたとない環境でしたが、文学部で野生動物を対象とした研究という全国でも稀有な分野に理解を示していただき、絶えず励ましをいただいた北大の懐の深さも、私にとってはかけがえのない研究環境でした。これまでの私の研究・教育にご理解・ご支援いただいた方々に心より感謝いたします。

私の研究はフィールドワークが主体でしたので、授業と研究の折り合いをつけるのは大変でしたが、フィールドでの野生動物との泥臭く凝縮した時間がオリジナリティのある研究にも結び付き、教育・研究の礎となったことは疑いのないことだと思っております。おかげさまで、教育研究総長表彰までいただき、学会や政府・自治体委員等の活動を通して研究の社会還元にも微力ながら貢献できたことは、社会に対するいくらかの恩返しにはなったかと思っております。

まだしばらくは外来種管理の現場からは離れられないかと思いますが、北大での経験を生かして、環境保全に関わり続ける所存でございますので、よろしくお願い申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年9月14日
昭和56年 3月 北海道大学文学部行動科学科（基礎行動学専攻課程）卒業
昭和58年 3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程心理学専攻修了
昭和63年 3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程心理学専攻単位修得退学
昭和63年 4月 北海道大学文学部助手
平成12年 4月 北海道大学大学院文学研究科助手
平成13年 4月 北海道大学大学院文学研究科助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4月 北海道大学大学院文学研究院教授

文学研究院教授

あべ かしょう
阿部 嘉昭 氏



アカデミズムの畑を歩いてこなかったための事務的な能力不足を、たえず同僚に補ってもらい、何とか定年退職までこぎつけました。思い出深い数多くの学生の顔も脳裡をよぎります。一般的に当方の専門と見なされていた映画とサブカルチャーのほか、前任校の流れから詩歌論も本学では専攻としました。北海道・札幌の落ち着いた風土に後押しされ、授業も良い刺激剤となって、とりわけ詩論について実績を残すことができたのが嬉しかったです。お陰さまで、『換喩詩学』（2014、思潮社）では第6回鮎川信夫賞を受けることができ、その後も立て続けに詩集・詩論の著作を重ねることができました。半面、東京にいたときの豊富な映画環境が貧しくなったのは致し方なかったことかもしれません。一番の思い出は、教授昇進のタイミングで、映画関係のモノグラフ『黒沢清、映画のアレゴリー』（2019、幻戯書房、博士論文も兼ねたもの）を書き下ろせたことでしょうか。映画のディテール考察と、現代思想的な裏打ちとを並行させ、日本映画自体を牽引する野心をもった難物でしたが、同僚の温かい叱咤激励なしにはこの本は決して実現できなかったと思います。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年8月2日
昭和57年 3月 慶應義塾大学法学法律学科卒業
平成31年 3月 北海道大学大学院文学研究科博士課程修了
昭和57年 4月 株式会社電化新聞社（アルバイト）
昭和60年 3月
昭和60年 4月 } 有限会社ジャックポット（正職員）
昭和61年 4月 }
昭和61年 4月 } 株式会社西友（正職員）
平成 2年10月 }
平成 2年10月 } 株式会社キネマ旬報社（正職員）
平成 6年 1月 }
平成 6年 1月 フリーランスで評論・編集活動に従事
平成11年 4月 } 立教大学文学部非常勤講師
平成19年 3月 }
平成19年 4月 } 立教大学文学部特任教授
平成24年 3月 }
平成24年 4月 北海道大学大学院文学研究科准教授
平成31年 4月 北海道大学大学院文学研究院教授

情報科学研究院教授

おのさと まさひこ
小野里 雅彦 氏



1985年に大学院の修士課程を修了して、東京、神戸、大阪の大学で教員を務めた後、2003年4月に北海道大学へとやってきました。色々な大学に在籍して多くの学生生活を見てきた私には、北海道大学は学習環境、生活環境、自然環境のすべてに恵まれていて、理想的な学生生活が用意されているように感じました。ただ、学生と話をしていると、北大生であることのありがたさを自覚していない人、享受していない人が多く、「もったいない!」と感じてしまいました。「君たちが学んでいる北大、進学しようと考えている北大は、こんなに多くの魅力があるのだよ」ということを伝えるために、「北大受験をすすめる100の理由」というWebコンテンツを制作し、ネット公開をしました。

(「北大受験 100の理由」で検索を行うと、最初の研究室サーバー版(フレーム使用)、Facebook版、Google Sites版の3種類が見つかりますが、内容はほぼ一緒です。)

北大に来て21年、着任当初に感じた北大の魅力の多くは維持されているように思います。ただ、全国的には当たり前でないことが当たり前と感じてしまう北大ボケになっている気もします。皆さん方で北大の新たな魅力を見つける、さらには自ら魅力を作り出すことで、より豊かな学生生活を過ごされることを願っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年4月13日
昭和58年 3月 東京大学工学部精密機械工学科卒業
昭和60年 3月 東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専門課程修士課程修了
昭和60年 4月 東京大学工学部助手
昭和62年10月 神戸大学工学部助手
平成元年 5月 大阪大学工学部助手
平成 5年12月 博士(工学)(東京大学)
平成 6年 4月 大阪大学工学部助教授
平成10年 4月 大阪大学大学院工学研究科助教授
平成15年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成16年 4月 北海道大学情報科学研究科教授
平成25年 7月 } 北海道大学評価室室員
令和 5年 6月 }
平成31年 4月 北海道大学情報科学研究院教授

情報科学研究院教授

むらやま あきひろ
村山 明宏 氏



2008年から情報科学研究院にお世話になりました。民間企業から前任大学を通じて、電子材料、特に当時は大きな話題となっていましたナノ材料やナノテクノロジーの分野に身を置いていました。ここ北大の情報科学では、いわゆる情報の分野に加えまして、半導体などの電子材料やデバイスの研究も盛んでして、多くの先生方や学生の皆さんとはとても楽しく、仕事と言いますか研究に取り組むことができました。本当に感謝しております。

研究を通じて考えさせられてきたことは、電子材料をナノという領域にまで小さくすることがどのように役に立つのか、そしてそこにはどのような新しい学理が見いだせるのかということです。原子まで小さくしてしまうのではなく、原子が数千から数十万個(ウイルスの1/10程度)の、我々が再現性良く作ることができる大きさですが、そこでは電子の本質的な性質である量子効果などを生かすことができます。最近では省エネルギー化に大いに役立つことが期待されてきており、ますます目が離せない科学技術になってきたと肌で感じています。私自身は明確な結論を得るには至っていませんが、ぜひ若い皆さんで発展させて欲しいと願っています。

略 歴

昭和58年 3月 東北大学工学部卒業
昭和60年 3月 東北大学大学院工学研究科修士課程修了
平成 6年 4月 東北大学大学院工学研究科博士課程編入学
平成 7年 3月 東北大学大学院工学研究科博士課程修了
平成 7年 3月 博士(工学)(東北大学)
昭和60年 4月 } 旭硝子(現AGC)株式会社勤務
平成13年 1月 }
平成13年 2月 東北大学科学計測研究所助教授
平成13年 4月 東北大学多元物質科学研究所准教授(改組)
平成20年10月 北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成28年 4月 } 北海道大学大学院情報科学研究科副研究科長
平成30年 3月 }
平成29年 4月 } 北海道大学総長補佐
令和 4年 3月 }
令和 5年 6月 } 北海道大学副理事
令和 6年 3月 }
令和 5年10月 } 北海道大学半導体拠点形成推進本部副本部長
令和 6年 3月 }

情報科学研究院教授

く どう みねいち
工藤 峰一 氏



思いがけなく憧れの北大に合格でき、友と掲示板の名を確認しに来たあの心地よい日から46年、よもやこれほど長く北大にいられるとは…

自ら招いたこととはいえ思い通りにいかずもがき苦しんだ学部時代。今から思えばこの時代に自分が何を望み何を望まないかを知ることができました。やっと息をつけるようになり、思い切り羽を広げられる喜びに打ち震えた大学院時代。思うがまま研究でき、しかも成果を論文という形で世界中の人と共有できることに夢中になりました。恩師に恵まれ図らずも教員に、しかも憧れの北大の教員になった喜びとそれに勝る不安を抱えた助手時代。当時の学生の皆さん、満足な指導もできず申し訳ありませんでした。海外の恩師や友人に恵まれ、多くの学生らと充実した研究生活を送ることのできた助教授時代。人との繋がりがなにより重要であることを知りました。そして、未熟ながらも研究室を任された教授時代。「褒める」ことを心がけるもののどうしても叱咤や批判を繰り返しました。当時の皆さん、悪気はなかったのですよ。

今日もまた心地よい日です。私の喜びはすべて北大とともにありました。愛する北大とその思いを一つにする皆さんに幸あらんことを。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年10月26日
昭和58年 3月	北海道大学工学部卒業
昭和60年 3月	北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和63年 3月	北海道大学大学院工学研究科博士課程修了
昭和63年 3月	工学博士（北海道大学）
昭和63年 4月	北海道大学工学部助手
平成 6年 4月	北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成13年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成16年 4月	北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成17年 4月	北海道大学大学院情報科学研究科副研究科長
平成18年 3月	
平成31年 4月	北海道大学大学院情報科学研究院教授

低温科学研究所教授

おおしま けいいちろう
大島 慶一郎 氏



私は学生時代、地球流体力学に魅せられ、理論研究からスタートしました。低温科学研究所に赴任してからは一転、現場観測や衛星観測を中心として研究を行ってきました。研究対象は、オホーツク海、南極海、北極海といった極域の海です。極域の海は海洋大循環の起点になっており、地球規模の気候変動や物質循環の鍵を握る海域です。しかし、現場へのアクセスが困難なため、未だ研究フロンティアであり続けています。私は、この研究対象に全く不足を感じることなく40年近くにわたって研究三昧させて頂きました。このようなテーマに対しては一人や少人数ではとても手に負えるものではなく、多くの同僚、PD、学生に恵まれ、よい共同研究ができたことに深く感謝しております。極域へのアクセスや新しい観測手法・機器の開発・取得には大きな予算が必要なのですが、JSPS等から大きなファンドを頂けたことも有難い限りです。秘書さんや事務・技術職員の方々にも強力なサポートを頂きました。教授退任を前にして、研究室の人数も活動も収束しない状況にあり、同僚やPD・学生の皆様にうまく研究を引き継ぎ発展させて頂きながら、2年間特任教員を務めた後も北大の外から細々と研究は続けるつもりでおります。蓄積されたデータ、PC、ネットワーク環境があれば、それが可能なので。最後になりますが、極めて恵まれた環境のもとで研究・教育に携われたこと、お世話になりました多くの皆様に感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和35年6月28日
昭和58年 3月	北海道大学理学部地球物理学科卒業
昭和60年 3月	北海道大学大学院理学研究科地球物理学専攻修士課程修了
昭和61年 3月	北海道大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士後期課程退学
昭和61年 4月	北海道大学低温科学研究所助手
平成元年12月	理学博士（北海道大学）
平成 6年 4月	北海道大学低温科学研究所助教授
平成20年 4月	北海道大学低温科学研究所教授
平成28年 4月	北海道大学北極域研究センター教授兼務
平成30年 4月	日本学術振興会学術システム研究センター研究員 併任
令和 4年 3月	

低温科学研究所教授

ふくい まなぶ
福井 学 氏



2004年8月縁もゆかりもない北海道大学に教授として採用して頂き、また、長期的視野に立って、独創的な研究に集中できる低温科学研究所で長きにわたって過ごせたことに関係各位に深く感謝しております。

国立研究所研究員やマックスプランク研究所での研究生活、大学の学部教員、大学附置研教員を経験したものととして、学問の発展には大学の役割がいかに重要であるかを痛切に感じています。自然界の微生物の生理生態に関する40余年の研究人生。総じて楽しく、実りのあるものであったと実感しています。「警視庁型」と「アマゾン型」。これは中谷吉郎博士が2分類した自然科学の研究方法です。目星がついている犯人を追いつめていくのが前者で、何が居るか居ないかも分からぬ未踏の地に飛び込んでいくのが後者。私の研究スタイルは「アマゾン型」を主としていますが、その過程で得た研究の芽に対して、警視庁型研究の展開をはかってきました。両スタイルを統合した研究が次の科学的発見に繋がります。許された再雇用の2年間は、周囲に迷惑をかけないよう、野外調査を続け、寒冷圏微生物生態学における新たな挑戦をしたいと思っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年9月11日
昭和58年 3月 新潟大学教育学部小学校教員養成課程卒業
昭和61年 3月 東京都立大学大学院理学研究科修士課程生物学専攻修了
平成元年 3月 東京都立大学大学院理学研究科博士課程生物学専攻修了
平成元年 3月 理学博士（東京都立大学）
平成元年 4月 通商産業省工業技術院公害資源研究所研究官
平成 5年10月 通商産業省工業技術院資源環境技術総合研究所主任研究官
平成10年 1月 通商産業省工業技術院エネルギー技術開発課及び技術評価課併任
平成10年 7月 東京都立大学大学院理学研究科助教授
平成16年 8月 北海道大学低温科学研究所教授
平成30年 4月 } 北海道大学低温科学研究所長
令和 4年 3月 }
平成30年 4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
令和 4年 3月 }

電子科学研究所教授

ささき けいじ
笹木 敬司 氏



1997年11月に電子科学研究所の教授として大阪から赴任し、26年余り北大にお世話になりました。着任した11月の札幌の物悲しい景色に少し不安になりましたが、月末に初雪の銀世界を見て感動したのを覚えています。今では、吹雪の日でも愛犬と散歩するのが最大の楽しみです。長年、光の不思議さと美しさに魅せられ研究を続けてきましたが、光・物質・生命・数理を融合した新しい研究領域の開拓を目指す電子科学研究所の素晴らしい環境で多様な分野の研究者と活動ができ、大変恵まれた幸せな研究人生を送ることができました。諸先輩方、同僚、研究者仲間、事務・技術職員の皆様のご指導やご支援に心より感謝いたします。また、電子研所長時代には、法人化後の大学改革が進む中で、附置研究所の在り方、学内における位置付け、国内外研究機関との連携、地域連携等、様々な観点から部局運営を学ばせていただきました。お世話になりました皆様に厚く御礼申し上げますとともに、北海道大学の益々の発展を祈念しております。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年9月23日
昭和56年 3月 大阪大学工学部応用物理学科卒業
昭和58年 3月 大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士前期課程修了
昭和61年 3月 大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士後期課程修了
昭和61年 3月 工学博士（大阪大学）
昭和62年 7月 徳島大学医学部助手
平成元年 4月 新技術事業団増原極微変換プロジェクト研究員
平成 4年 9月 大阪大学工学部助手
平成 9年 8月 大阪大学工学部助教授
平成 9年11月 北海道大学電子科学研究所教授
平成17年10月 } 北海道大学電子科学研究所長
平成21年 9月 }
平成21年10月 } 北海道大学電子科学研究所附属
平成24年 3月 } ナノテクノロジー研究センター長
平成24年 4月 } 北海道大学電子科学研究所附属
平成27年 9月 } グリーンナノテクノロジー研究センター長

電子科学研究所教授

いしばし あきら
石橋 晃 氏



大学院修士課程（物理学）を修了後、19年間ソニー中央研究所で電子デバイス、特に半導体超格子の研究を行い、学位取得後はイリノイ大学物理学科にてSony-John Bardeen Chairプログラムの下、半導体ナノ構造の研究を行いました。帰国後は光デバイス、特にII-VI族青色・緑色半導体レーザの研究開発に携わり、室温連続発振を世界で初めて達成する事ができました。2003年1月1日付で教授に採用されて、以来、受光発電分離・2次元接続太陽光発電システムと“分子換気”による全く新しい高纯净環境による、高効率エネルギー環境システムの研究開発に21年3カ月の長きに亘り尽力して参りました。

それぞれの環境で多くの優れた研究者仲間にも恵まれて、大いに刺激を受けながら色々と思案を巡らす事ができ、心躍る達成事項や新機軸の社会実装の喜びを味わう事もできました。その間一貫して、物理学に支えられ、また導かれていた様に感じています。多くの海外研究者と共同研究を進められた事は、掛け替えのない経験となりました。

21世紀初頭の変化に富む時代の中でお世話になった教職員、事務の方々、学生の皆さんをはじめ、ご支援・ご厚情を賜りました皆様に深く感謝申し上げます。北海道大学の益々の発展を祈念致しつつ、退職後は、これまでの経験を糧として若手の皆さんと共に更なる社会貢献へと、微力ながら繋げて参りたいと思っております。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年7月17日
昭和56年 3月 東京大学理学部物理学卒業
昭和58年 3月 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
平成 2年 1月 博士（理学）（東京大学）
昭和58年 4月 } 民間（ソニー株式会社）
平成14年12月 }
平成 2年 8月 } イリノイ大学物理学科
平成 3年 9月 } John Bardeen Chair Sony-Visiting Faculty
平成10年 5月 東北大学学際科学研究センター客員教授
平成15年 1月～北海道大学電子科学研究所教授
平成18年12月～北海道大学認定スタートアップ・シーズテック株式会社 取締役CTO

遺伝子病制御研究所教授

た な か か ず ま
田中 一馬 氏



1998年に医学部附属癌研究施設生化学部門（当時）の教授として赴任させていただき、これまで基礎生命科学の研究に取り組んでまいりました。初期の研究過程で生体膜脂質を二重層間輸送するタンパク質がサブユニット構造を取ることを明らかにしたことをきっかけに、脂質生物学を専門の分野といたしました。基礎分野でオリジナルな研究成果を残せば、いずれ医学の発展に寄与できるかもしれない、との希望を胸に研究を続けて来ました。思い返せば、良い研究はどのようにすればいいのか、煩悶の日々でしたが、自分たちの残した論文が、将来の発展の礎になるかも知れないと考えるだけでも、この職業に就けたことの有り難さを感じます。

ほぼ自宅と研究室を徒歩で往復する毎日でしたが、農学部前から中央通りへ抜けるエルムの森の四季折々の美しさには日々癒されました。

一緒に研究をしてくれたスタッフや大学院生の皆さん、より良い研究所にするために努力していただいた同僚の先生方、大学院教育でお世話になった先生方、研究所や研究室の教育・研究と運営を支えていただいた技術職員、事務職員の皆さんに感謝しつつ、北大を去りたいと思います。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年4月21日
昭和56年 3月 大阪大学工学部卒業
昭和58年 3月 大阪大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和58年 4月 民間（サントリー株式会社）
昭和61年 6月 広島大学工学部助手
平成元年 3月 工学博士（広島大学）
平成 3年 4月 東京大学理学部助手
平成 4年 8月 神戸大学医学部助手
平成 6年 2月 大阪大学医学部助手
平成 8年12月 大阪大学医学部助教授
平成10年10月 北海道大学大学院医学研究科教授
平成12年 4月 北海道大学遺伝子病制御研究所教授
平成22年 4月 } 北海道大学遺伝子病制御研究所長
平成24年 3月 }
令和 2年 4月 } 北海道大学遺伝子病制御研究所長
令和 4年 3月 }

触媒科学研究所教授

ふくおか あつし
福岡 淳 氏

昭和61年に触媒研究所の助手として着任以来、30年以上を北大で過ごしました。この間、研究以外で最大の思い出は触媒科学研究所への改組です。平成元年に触媒研究所は触媒化学研究センターに降格となったのですが、平成22年にセンター長になった時、研究所への復帰が最優先課題でした。我々の戦略は、質の高い日本の触媒研究の宣伝活動を行い研究所に復帰する、というものでした。具体的には、鈴木章先生と根岸英一先生がノーベル化学賞に近いという我々の観測に基づき、平成17年から毎年海外シンポジウムを開催し両先生の研究成果をアピールしたのです。この戦略の是非についてはセンター内で激しい議論がありましたが、自前のノーベル賞候補をもたない状況での策として進めました。そして平成22年10月に両先生のノーベル賞受賞が発表されたのです。ビッグチャンスが来たと感じました。その後、センターは人員増を認められ平成27年10月、26年ぶりに附置研究所への復帰を果たしたのです。一度下がった評価を元に戻すにはノーベル賞という飛び道具と26年という長い年月が必要でした。私の経験が皆様の参考になれば幸いです。北大の益々の発展を祈念します。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年7月12日
昭和57年 3月	東京大学工学部合成化学科卒業
昭和59年 3月	東京大学大学院工学系研究科工業化学専門課程修士課程修了
昭和60年12月	東京大学大学院工学系研究科工業化学専門課程第1種博士課程中退
昭和61年 1月	北海道大学触媒研究所助手
平成元年 5月	北海道大学触媒化学研究センター助手
平成元年12月	工学博士（東京大学）
平成 3年 4月	東京農工大学工学部講師
平成 7年 8月	東京農工大学工学部助教授
平成 9年 4月	北海道大学触媒化学研究センター助教授
平成19年 4月	北海道大学触媒化学研究センター教授
平成22年 4月	触媒化学研究センター長
平成26年 3月	
平成26年 4月	総長補佐
令和 2年 9月	
平成27年10月	触媒科学研究所教授
令和 2年10月	北海道大学総長補佐
令和 6年 3月	

触媒科学研究所教授

あさくら きよたか
朝倉 清高 氏

1999年4月より北海道大学にお世話になりました。25年間好き放題やって、周りの人にはご迷惑をかけました。どうぞお許してください。また、この長きにわたり多くの方からご厚情いただき、感謝の言葉ありません。この25年間で思い出されることは、化学系の夏季学校と20年間の長きに亘り化学I,IIを担当させていただけたことです。化学I,IIをそろそろ辞めようと思ったときにコロナが流行し始めました。リアルタイムオンライン統一講義を化学Iで実施するというので、皆さんと協力し、5月の連休も潰して準備し、二ヶ月間、突っ走りました。統一講義をしていますから、教え方でいろいろ皆さんと議論したのは良い思い出です。とくになぜ氷はすべるのかということでは、議論伯仲して楽しかったです。これからはいろいろな危機が私たちに降りかかってきますが、その危機は乗り越えられないものではありません。みんなが心を開き議論し、みんなで協力すれば、必ず乗り越えることができます。最後に悔いることはたくさんありますが、皆さんのご活躍とご多幸、北海道大学の更なる発展を祈念して、PC画面を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年6月12日
昭和56年 3月	東京大学理学部化学科卒業
昭和58年 3月	東京大学大学院理学系研究科化学専門課程修士課程修了
昭和59年 9月	東京大学大学院理学系研究科化学専門課程第1種博士課程退学
昭和59年10月	東京大学理学部助手
昭和62年 9月	理学博士（東京大学）
平成 4年10月	東京大学理学部講師
平成 5年 4月	東京大学大学院理学系研究科講師
平成 6年 5月	東京大学理学部附属スペクトル化学研究センター助教授
平成10年 4月	東京大学大学院理学系研究科附属スペクトル化学研究センター助教授
平成11年 4月	北海道大学触媒化学研究センター教授
平成26年 4月	触媒化学研究センター長
平成27年 9月	
平成27年10月	触媒科学研究所教授
平成27年10月	触媒科学研究所長
平成30年 3月	

情報基盤センター教授

たか い よしあき
高井 昌彰 氏



東京に婚約者を一人残して札幌に赴任。秋深いエルムのキャンパスで私を持ち構えていたのは教養科目情報科学を履修する1クラス250名もの理I系1年生でした。本籍の工学部教授会と教養部教官会議のカルチャーの違いに最初の衝撃を受けました。大学院重点化に伴い工学部から大型計算機センターに異動。大学の枠を超えて旧七帝の一翼を担う志と全国を俯瞰する高い視座を叩き込まれました。「人の3倍働いて一人前」と言われたのは2度目の衝撃でした。法人化前年に情報基盤センターに改組されると、教授昇進後ほどなく北大初のCIO補佐官に任命され、自ら先頭に立って本学の情報環境整備を推進しました。高村光太郎の「道程」の心境です。情報・システム最適化、SSO、学術認証基盤、職員証ICカード、eduroam、BYOD、クラウド、包括ライセンス。これらはみな今日の大学DXのオリジンとなる最初の挑戦でした。幾度かの躓きを経験しつつも、北大の情報環境を世界水準と呼べるまでに引き上げることができたと自負しております。同時に、研究室学生達の教育・研究指導が私自身の最も充実した楽しいひと時だったことに間違いはありません。札幌で生まれた二人の娘たちは独立し、それぞれの道を歩んでいます。改めて36年の時の流れを振り返り、これまでお世話になった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和35年4月4日
昭和58年 3月	東北大学工学部電子工学科卒業
昭和60年 3月	東北大学大学院工学研究科情報工学専攻博士課程前期2年の課程修了
昭和63年 3月	東北大学大学院工学研究科情報工学専攻博士課程後期3年の課程修了
昭和63年 3月	工学博士（東北大学）
昭和63年 4月	東京大学理学部助手
平成元年10月	北海道大学工学部講師
平成 4年 4月	北海道大学工学部助教授
平成 7年 4月	北海道大学大型計算機センター助教授
平成15年 4月	北海道大学情報基盤センター教授
平成16年 4月	北海道大学情報基盤センター副センター長
平成23年 3月	
平成18年 4月	北海道大学情報化統括責任者（CIO）補佐官
平成19年 3月	
平成19年 4月	北海道大学情報環境推進本部情報化統括責任者補佐役
令和 6年 3月	
平成23年 4月	北海道大学情報基盤センター長
平成31年 3月	
令和 5年 4月	北海道大学情報環境推進本部副本部長
令和 6年 3月	

北方生物圏フィールド科学センター教授

むねはら ひろゆき
宗原 弘幸 氏



教員となって32年、大学院生時代を含めると40年間も楽しんできた白尻水産実験所とお別れです。カジカやアイナメ、ダンゴウオやトクビレなど、見た目も繁殖方法もユニークな雑魚（ざこ）たちに囲まれ、時が経つのも忘れて遊んでいたら、肩を叩かれました。そんなに長く白尻（函館市）に居たとは思いませんでしたが、歳を数えてみると、確かに約束の年齢です。どおりで頭髮が白い。

血縁のない子を保護する交尾型カジカや父親の遺伝子を伝えない卵を産むアイナメ属雑種。ダーウィンの進化論やメンデルの法則など、高校で習う生物の常識では簡単に解けない難問を出題するのが北海道の魚たちです。そうした難題解説に先達の御指導を仰ぎ、潜水調査と飼育実験の試行錯誤を生業にしてきました。専門外の方々にも成果を伝えて、多様な雑魚たちの学術的価値を高めたかった。研究材料と環境に恵まれた割には、現在の生物科学レベルでブレイクする結果に至らず、集中力の欠如と能力不足が悔しい。それもこの期に及んでは苦酸っぱい青春の滴。北大と白尻の海と魚たちに献杯。

これからは陸に上がる時間が増えるでしょう。北海道の海の自然環境が良好に持続するための研究や教育活動を応援します。

略 歴

昭和57年 3月	北海道大学理学部卒業
平成元年 3月	北海道大学大学院水産学研究科博士課程修了
平成元年 3月	水産学博士（北海道大学）
昭和57年 4月	民間（テルモ株式会社）
昭和57年12月	
平成元年 4月	日本学術振興会特別研究員
平成 3年 3月	
平成 3年 4月	財団法人水産科学研究奨励会研究員
平成 4年 3月	
平成 4年 4月	北海道大学水産学部附属白尻水産実験所助手
平成13年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教授
平成19年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター准教授
令和元年11月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
平成13年 4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション白尻水産実験所長
令和 6年 3月	

水産科学研究院准教授

いそだ ゆたか
磯田 豊 氏

私が愛媛大修士1年のとき、日本海洋学会が函館（北大水産）で開催され、学会発表はもちろん、飛行機・北海道・ばかでかい魚（ホッケ）との対面・青函連絡船・八甲田山・夜行列車・東京上野・・・を初めて経験し、もう来ることはないだろうと四国松山までの帰り旅を楽しんだものです。が、その10年後、縁あって来函することができ、それから約30年も北大水産でお世話になりました。せっかく北海道に来たので、4つの海（日本海・オホーツク海・北太平洋・津軽海峡）に囲まれた海の姿を、少しずつでも詳細に記述することを研究目標の1つに致しました。毎年入れ替わる学生さん、北大水産学部附属練習船「うしお丸」の士官や船員さんのご協力のもと、過去の資料解析や新たな海洋観測によって、海域毎に異なる季節変化が見え始め、不完全ながらも、それぞれの物理的考察を楽しむことができました。個人的には、とても充実した30年間であり、北大関係者の皆さまに、心より感謝致します。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年3月23日
 昭和58年 3月 愛媛大学工学部卒業
 昭和60年 3月 愛媛大学大学院工学研究科海洋工学専攻修士課程修了
 昭和60年 4月 財団法人日本気象協会調査部海洋気象室海洋調査課
 昭和62年 4月 愛媛大学工学部助手
 平成 5年 3月 博士（理学）（北海道大学）
 平成 6年 4月 北海道大学水産学部助教授
 平成12年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授
 平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授
 平成19年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院准教授

農学研究院准教授

ふくし ゆきはる
福士 幸治 氏

農学部、農学研究院、民間の農薬研究所、次いで農学部の教員として農業に関係する研究・教育に45年間（1979.4-2024.3）携われたことはたいへん幸せでした。退職後は、札幌市の「花と緑のボランティア団体（さっぽろタウンガーデナー）」に登録できたので、隣接する創成川沿いの緑地を整備する予定です。

留学生担当講師として、北大への留学希望者や留学希望の北大生への対応、農学部学生の海外短期派遣（引率）や協定校等の学生の短期受入も得難い経験でした。

学部・修士の研究課題がヒトリシズカ・フタリシズカのセスキテルペン類の構造解析でした。北大に戻ってから、いろいろな種類の有機化合物を対象としたラセミ体の光学分割法や分割した化合物のNMRを用いた絶対配置決定法を開発してきました。その成果の1つとして、修士の時に単離した化合物の絶対配置を一義的に決定できました。

北大の自由でおおらかな気風が幸いし、研究者として定年まで勤めることができました。

北大と農学部に深く感謝するとともに、今後のさらなる発展を、心よりお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年2月28日
 昭和56年 3月 北海道大学農学部農芸化学科卒業
 昭和58年 3月 北海道大学大学院農学研究科農芸化学専攻修士課程修了
 昭和58年 4月 } 民間（三井東圧化学株式会社）
 平成元年 1月 }
 平成元年 2月 北海道大学農学部助手
 平成 8年 3月 博士（農学）（北海道大学）
 平成11年 4月 北海道大学大学院農学研究科助手
 平成13年 4月 北海道大学大学院農学研究科講師
 平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究院講師
 平成26年 4月 北海道大学大学院農学研究院准教授

工学研究院准教授

やま だ まさ ひこ
山田 雅彦 氏



昭和54年4月に北大に入学以来、44年間を北大で過ごして来ました。その間、数え切れない方々のお世話になり、また、あるときはご迷惑をおかけしつつもこの3月で30年余の教員生活を終えることができます。

学生時代、将来の職業に対するビジョンなど全く無く、ましてや学生さんの教育に携わる母校の教員になるとは思っていませんでしたが、恩師である福迫尚一郎北大名誉教授のご指導のお陰でようやく勤め上げることができました。

福迫先生には、「学問・研究においては、学生も教員も対等である」と教えられ、また、「学生が指導教員を遙かに超えて上に行くこと」を目標に、研究を通じて教育に努めて来たつもりです。そのためか、学生からの評価は『鬼』だったようです。

この十数年は、社会の変化とともに教育・研究に対する考えや学生の気質が大きく変わりつつあると感じ、自分が教育を受けた時代の北大の空気を思い出すといろいろな思いがありますが、これから北大を支える若い世代の皆さんには老兵の感傷を踏み越えて、力強く自分の道を邁進されることを祈念するばかりです。

最後になりますが、これまでお世話になりました多くの皆様に御礼を申し上げるとともに、北大と皆様のますますのご発展を祈念申し上げます。有り難うございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和35年12月1日
昭和58年 3月 北海道大学工学部卒業
昭和60年 3月 北海道大学大学院工学研究科機械工学第二専攻修士課程修了
昭和60年 4月 } 民間（株式会社日立製作所）
昭和61年 9月 }
平成 2年 3月 北海道大学大学院工学研究科機械工学第二専攻博士後期課程修了
平成 2年 3月 工学博士（北海道大学）
平成 2年 4月 北海道大学工学部講師
平成 5年 4月 北海道大学工学部助教授
平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科准教授
平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院准教授

工学研究院准教授

た ち かわ ひ ろ と
田地川 浩人 氏



1982年3月に東京高専を卒業し、4月に北海道大学工学部に編入学して以来、そのまま今日まで北大工学部にお世話になっております。それどころか、4年生の研究室配属以来、そのまま今日まで、同じ研究室でお世話になっております。研究室の名前は、工業物理化学（吉田 宏先生、小笠原正明先生）、化学分光光学（市川恒樹先生）、電子材料化学（安住和久先生）と変わり、研究室全体のテーマは、なんとなく変わりましたが、先生方のご配慮で私は自由に研究をさせて頂きました。心から感謝致しております。研究は、量子化学、及び分子動力学理論を基礎とし、電子材料（半導体材料）、及びエネルギー材料の理論開発を中心に行っております。これらの（少しは役に立つ）専門領域の研究に加えて、趣味の領域といえる役に立たない研究も行っております。たとえば最近、「塩酸（HCl）は、何個の水分子で溶ける（イオン解離する）か？」についての研究結果を英国化学会誌で公表しました。（何個で溶けるか興味のある方は、H. Tachikawa, Phys. Chem. Chem. Phys., 2024, 26, 3623-3631をご覧ください）。現在、「塩（NaCl）は、何個の水分子で溶けるか？」についての研究結果をまとめております（2024年中に公表予定）。こんな役に立たない研究を長年にわたりさせて頂いた北海道大学、教職員の皆様、同僚の皆様に心より感謝申し上げますとともに、北海道大学のますますの発展を祈念しております。

略 歴

昭和60年 3月 北海道大学工学部卒業
昭和62年 3月 北海道大学大学院工学研究科応用化学専攻修士課程修了
昭和63年 3月 北海道大学大学院工学研究科応用化学専攻博士後期課程退学
昭和63年 4月 北海道大学工学部助手
平成 6年12月 博士（工学）（北海道大学）
平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助手
平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教
平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院助教
令和 5年 4月 北海道大学大学院工学研究院准教授

工学研究院准教授

お ぎ さ た か お
小篠 隆生 氏

私が北海道大学での30年間で行ってきたことは、簡単に言うと何かを繋げる可能性を探るというものだったと思います。工学部の再開発やキャンパスマスタープランの策定を通じてのキャンパスの計画論に関する研究活動は、研究、教育という分野から飛び出して建築の実践、そして地域づくりと連鎖・創造的に展開してきたのです。北海道大学はリベラルアーツを基礎にして全人教育を行うというのが創設期の札幌農学校からの建学の精神です。このような大学に身を置いた30年は、人、建築、地域を繋ぐ可能性を様々なかたちで探り、それを実践してきた時間だったと改めて思います。繋がる可能性を探ることが、北海道という地域のサステナビリティを高めることに繋がりますし、北海道から世界への発信にもなるでしょう。実際に東川町でのプロジェクトと並行して、調査研究をしていたイタリアのコミュニティ拠点創造に関する研究において、イタリアから得られた知見の多くは、東川町での複合交流施設せんとぴゅあの計画や設計に活かされています。また、東川町での公共建築設計を契機とした地域マネジメント活動は、イタリアをはじめとして、フィンランド、中国、韓国などの国々にも紹介され、多くの評価を得ています。

このような活動ができたもの、周りで一緒に同じ方向を向いた活動ができる仲間恵まれたこと、そして、様々な分野の方々との創造的な出会いがあったからこそなのです。大学は、新しいものごとを創造する場です。そのような場を今後も社会のためにどうぞ活かしていただきたいと思います。

長い間、本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年8月25日
昭和58年 3月 北海道大学工学部卒業
昭和58年 4月 } 民間（東海興業株式会社）
平成 5年 3月 }
平成 5年 4月 北海道大学工学部助手
平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助手
平成11年12月 博士（工学）（北海道大学）
平成18年10月 北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科准教授
平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院准教授

工学研究院准教授

お お み た つ や
大参 達也 氏

1977年に入学して以来、学生、教員と立場は変わりながらも47年間も北海道大学にお世話になりました。漱石の『坊ちゃん』をもじるなら「親譲りの一匹狼」で子供の時から損ばかりして来た…かどうかは判りませんが、少なくとも研究においては、一匹狼らしく流行に気をとられずに、自分が興味を持ったテーマを納得するまで追いかけることができたのは、中央から遠く離れ自由の気風を残した北海道の地であったからだ、改めて感謝しています。

定年退職を控えた今、半世紀近くの記憶の中で鮮明に思い出されるのは、入学のために来札して早々に飛び込んだ恵迪寮の老朽化し雑然とした廊下の光景と、教員として大学に残ることを決めた時に眼に映った手稲山の白い頂、そして春から夏にかけての数ヶ月、AGHの客員研究員として滞在したポーランドの古都クラクフの街並みです。これらの記憶に共通して付随するのは、北国の春の清冽な空気であったように思われます。退職後は、春の到来と共にまた新しいことに挑戦していきたいと思っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年10月5日
昭和57年 3月 北海道大学工学部卒業
昭和59年 3月 北海道大学大学院工学研究科金属工学専攻修士課程修了
昭和59年 4月 北海道大学工学部助手
平成 5年 3月 博士（工学）（北海道大学）
平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助手
平成16年 2月 北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院工学研究科准教授
平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院准教授

歯学研究院准教授

やすだ もとあき
安田 元昭 氏



大学での長いキャリアの中で、数多くの学生との出会いがありました。彼らとの交流や指導を通じて、自らも成長し続けることができました。学生たちの情熱や独創性は、常に私に新たな刺激を与えてくれました。研究活動もまた、私の大学生生活の重要な一部でした。新しいアイデアを追求し、問題に取り組む過程で、多くの洞察と発見がありました。同僚や共同研究者との協力は、常に刺激的で充実したものでした。また、大学は教育だけでなく、コミュニティとしての魅力もありました。多様な文化やバックグラウンドを持つ人々との交流は、私の視野を広げ、新しい視点を得る機会となりました。振り返れば、喜びや成功だけでなく、失敗や困難もありました。しかし、それらはすべて成長の機会であり、私を強くし、より理解の深い人間にしてくれました。北海道大学での定年を迎える今、感謝の気持ちでいっぱいです。この素晴らしいコミュニティで過ごした時間は、私の人生にとって貴重なものであり、これからもその価値を大切にしていきたいと思います。

略 歴

平成 3年 3月	北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了
平成 3年 3月	歯学博士（北海道大学）
平成 3年 7月	北海道大学歯学部助手
平成12年 4月	北海道大学大学院歯学研究科助手
平成14年 2月	北海道大学大学院歯学研究科助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成29年 4月	北海道大学大学院歯学研究院准教授

産学・地域協働推進機構教授

おおばやし あきひこ
大林 明彦 氏



2016年、北海道大学に赴任し、以来、8年間、本学の安全保障輸出管理に関して、FD、業務監査、特に足で稼ぐ教員との個別面談に力を入れて取り組んで参りました。お蔭様で、学内皆様のご協力を得て、無事大過なく定年年齢となり、退職を迎えることができました。

また、獣医・人獣の先生方からの要望を受けて、鳥インフルエンザウイルスの規制を高病原性のものに限定する法改正に寄与。科研費の研究代表者として二期連続で採択され、AIを使用した技術流出防止関連の研究に取り組むこともできました。

学外では、経済産業省委託事業である輸出管理アドバイザーとして、地方国立大学等の輸出管理体制を構築し、北海道地区の大学等の輸出管理ネットワークを経済産業省北海道経済産業局のご協力を得て2019年に立上げました。また、輸出管理DAY for ACADEMIA実行委員長を務めました。

昨年は、ドイツ政府と国連の招きで、日本のアカデミア代表として独エアランゲンで発表の機会を与えられ、今後の機微技術の取り組みについて提案して参りました。

退職後も本学工学研究院の客員教授として科研費研究等でしばらくお世話になります。在任中のご厚誼に深く感謝いたしますと共に、北海道大学のますますのご発展をお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年8月16日
昭和58年 3月	東京大学工学部計数工学科卒業
昭和58年 4月	日本電気株式会社入社
平成28年 5月	北海道大学 産学・地域協働推進機構 教授

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
6.25	駐日コンゴ共和国大使館 Sabri Kiçmari 特命全権大使	今後の交流に関する懇談及び講演会
6.2.26	駐日スリランカ民主社会主義共和国大使館 Eluppitimudiyanselage Rodney Manoranjan Perera 特命全権大使	今後の交流に関する懇談



Sabri Kiçmari 駐日コンゴ共和国大使（右から3人目）



Eluppitimudiyanselage Rodney Manoranjan Perera
駐日スリランカ民主社会主義共和国大使（左から4人目）

（国際部国際連携課）

■ 人事

令和6年3月1日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 大学院工学研究院教授	田 坂 裕 司	大学院工学研究院准教授

新任教授紹介

令和6年3月1日付



工学研究院教授に

た さ か ゆ う じ
田坂 裕司 氏

機械・宇宙航空工学部門
熱流体システム分野

最終学歴

北海道大学大学院工学研究科機械科学専攻博士後期課程修了（平成17年3月）

博士（工学）（北海道大学）

専門分野

流体工学

編集メモ

- 一般選抜の前期日程、後期日程個別学力検査等が無事終了しました。
今年度の入試業務に当たられた教職員の皆様、お疲れ様でした。



試験会場の様子

- 3月4日（月）から、本学公式クラウドファンディングプロジェクト第5弾が新たに始まりました。
詳細は、QRコードからご覧ください！

北海道大学クラウドファンディング
<https://readyfor.jp/pp/hokudai>



裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は第一体育館です。今年も色とりどりの華やかな衣装を身につけた卒業生・修了生が、このキャンパスから旅立っていきました。一人一人異なる、この大学での学びや経験を自信に変えて、新たなステージでご活躍されることをお祈りしています。

キャンパス風景 48 第一体育館（北17条西7丁目）



北大時報 ③ No.840 令和6年3月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimu.hokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>